

インタビュー

近世飛脚史研究回顧録

— 藤村潤一郎先生に聞く —

話し手 藤村潤一郎（国文学研究資料館名誉教授）

聞き手 玉井幹司（物流博物館学芸員）

巻島隆（群馬県地域文化研究協議会会員）

小田忠（株式会社ティジー・テック代表取締役）

池田治司（大阪商業大学所業史博物館学芸員）

はじめに

103 池田 本日は藤村潤一郎先生のインタビューにお集まりいただきましてありがとうございますと申し上げます。

まず、藤村先生にはインタビューをご快諾いただき、非常に光栄に存しております。また藤村先生をはじめ、群馬県地域文化研究協議会会員の巻島様、物流博物館の玉井様、それからティジー・テックの小田様、皆様にこのような機会を作っていただきまして感謝しております。

今から飛脚研究の第一人者である藤村先生にお話をお伺いし、先生の長年にわたる研究史を振り返っていただくと同時に、近世飛脚史研究の現状と今後の課題に光を当てていきたいと考えております。長時間にわたりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

1. 交通史に興味を持った理由

藤村 まず、交通史に興味を持った理由からお話しします。これは非常に散文的な話です。僕の父が高知と大阪との間の汽船会社で働いておりました。今で言えば二〇〇トンくらいの漁船みたいなものです。貨物とか客船が三隻か四隻くらいの会社だったと思うのですが、親父が大阪の支店に勤めている時に僕は豊中で生まれました。

高知へ帰ったのは二歳くらいですから、大阪での記憶は全くありません。僕が小学校へ行く前にその汽船会社が潰れました。ところが、日本の海軍省がどうした訳か、『海と空』という船と飛行機の雑誌を、汽船会社が潰れているのに送って来るのです。それを僕は子供だったかから貰ったわけです。

強いて言えば、交通との関係はそのぐらいです。それからよく冷やかされるのは、どういうのかわかりませんが、私は心臓の打ち方がちょっとおかしいのです。大学入学試験を受ける時に身体検査で医者が「君は階段を上がるのは苦しくないか」と言ったら「大丈夫です」と言ったら、「それならいいけど、過激な運動をするな」と言われました。

だから、僕は今でも歩くのが遅いのです。それは大学に入ってからわかりましたが、私は駆



藤村 潤一郎

(一九二九 -)

東京大学卒。国文学研究資料館教授、創価大学教授を経て、現在国文学研究資料館名誉教授。創価大学名誉教授。近世交通史・近世農村史。特に、尾張・紀伊徳川家の七里飛脚、金沢藩の大名飛脚、江戸定飛脚問屋及び地方出店、六組飛脚などの研究を開拓。論文に「近世中期京都順番飛脚問屋の研究」(『史学雑誌』第七四号、山川出版社、一九六五)、「飛脚問屋」(『日本歴史』第二三八号、吉川弘文館、一九六八)、「通日雇について」(『史料館研究紀要』第六号、国文学研究資料館史料館、一九七四)、「江戸三度飛脚問屋江戸屋飯塚家の系図、過去帳について」(『大阪商業大学商業史博物館紀要』第四号、大阪商業大学商業史博物館、二〇〇三)、「近世後期における雲州七里について」(『郵便史研究』第三〇号、郵便史研究会、二〇一〇)など。

けっこでビリにならなかったのは一回だけなのです。それは友達が一人、駆けっこで転んで、僕は大喊張りで「今日はビリじゃなかった」と言いました。それが飛脚の研究をやると言つのでしよう。もうおかししいし、知っている人は「おまえが？」と言つから、「いや、実際にやるのと書くのは別だ」と言いました(笑)。そのくらいです。

2. 大学時代の思い出

藤村 これは後でお話する岩生成一先生⁽¹⁾のことと絡むのですが、僕にとつて忘れられないのは大学に入った時、東大の史料編纂所から九州大学へ竹内理三さん⁽²⁾が行つたのです。僕は竹内理三先生を知らないわけです。入学して演習に出ても、もう不勉強ですから、室月圭吾先生⁽³⁾の古文書学なんていうのは、行って当てられても読めないでしょう。

佐藤進一先生⁽⁴⁾の『吾妻鏡』は活字ですから、これならましだろつと思つて出たわけです。悪いことに報告に当たつたら、いい高等学校から来た同級生は上級生に先輩がいますから、当たつたからどうしましようと言えば上級生が教えてくれる。今で言えば大学院生が教えているわけです。僕が当たつたら、悪いことになが共産党のバリバリで旗ばつかり振つてた人です。「××先生のような反動的な先生の授業は受けなくてもいい」とか言われて説教を食らつたのです。ところが、紙切れ一枚をもらつて卒業してうちへ帰らないと飯が食べられないと、反動的もへつたくれもあるかというので出たわけです。

四苦八苦して困つてしまつた時に、佐藤進一先生は、入学したばかりの学生の報告ですから何をネタにしているというのは百も承知ですが、黙つて聞いてくれたのです。普通は「何の辞書を使つたんだ。それは何だ」と、これを徹底的にやられるのです。ところが、上級生とか大学院生は史料編纂所へ行つて、関連の影写本を見てきて報告するわけです。こちらは古文書が

(1) 岩生成一(一九〇〇—一九八八)

東京帝国大学卒。東京帝国大学史料編纂掛、台北帝国大学教授を経て東京大学教授。日本近世対外交渉史。『南洋日本町の研究』(南亜文化研究所、一九四〇)・『朱印船貿易史の研究』(弘文堂、一九五八)・『南洋日本町の研究』(岩波書店、一九八七)

(2) 竹内理三(一九〇七—一九九七)

東京帝国大学卒。東京帝国大学史料編纂所編纂官、九州大学教授、東京大学史料編纂所教授、同所長、早稲田大学教授。日本古代史、中世史。『寧楽遺文』(東京堂、一九六二)・『平安遺文』(東京堂、一九六〇—一九六五)・『鎌倉遺文』(東京堂、一九八〇—一九九七)

(3) 室月圭吾(一九〇六—一九八七)

東京帝国大学卒。東京帝国大学史料編纂所編纂官、東京大学教授、同史料編

読めないのです。第一、『大日本古文書』なんていうのがあるんだってさ」という人間ですからね。それで、研究室へ行って見たら、明治時代の検非違使の研究とかいうこんな赤茶けた本があつて、これだ、これだと言つのでそれで報告して、先生はきつと持てあましていたと思ひます。

一方、岩生先生は、辻善之助先生⁽⁵⁾はこういうことをおっしゃつたというふうなことを言われました。恥ずかしい話ですけども「辻先生というのがおるんじやそうな」ぐらいのところでした。

小田 史料編纂所長もされた辻善之助ですね。

藤村 そうです。僕の場合は定年になつて上智におられました。それで、元に戻りますと、心地がついて一年生の終わりくらいに岩生先生に口をきいても怒らないだろうなと思つて、しゃべらないといけないけれども先生は怖いのです。僕は下宿を追い出されて、お茶の水へ行つて下宿を探さないといけないのですが、下宿探しのカードを見て、これから下宿を探しに行こうと思つて東大のバス停で突つ立つていたら、悪いことに岩生先生が来たのです。まずいなと思つたら、先生が来て「僕は家がないんで探してるんだけど、君、どつか家はないか」と言うので、「先生、僕も追い出されて部屋を探してる最中です」ということから岩生先生と話をしようになりました。それで、岩生先生が辻先生の『田沼時代』ですね、「あれは面白い本だから読んでごらん」とおっしゃいました。

二年生になつて、先生の機嫌がいい時に、「史料編纂所は惜しい人を手放しましたね」と言うのです。竹内君を九大へ出したというわけです。二年の終わりに、岩生先生は「九大はね、出張旅費がいくらでもあるんだそうだ」と仰いました。そんなことはあり得ないわけです。それで、竹内さんは単身赴任で行つて、研究室へベッドを持ち込んでいたというのです。それで、ベッドの頭に九州の白地図を置いて、調査に行つたところへ赤い点を打つたというので

纂所教授兼任、東洋大学教授。日本中世史。『中世灌漑史の研究』（畝傍書房、一九四三）・『中世量制史の研究』（吉川弘文館、一九六一）・『中世日本の売券と徳政』（吉川弘文館、一九九一）

(4) 佐藤 進一（一九一六一）東京帝国大学卒。東京大学史料編纂所所員、名古屋大学助教授、東京大学教授、名古屋大学教授、中央大学教授。日本中世史。『鎌倉幕府訴訟制度の研究』（畝傍書房、一九四三）・『室町幕府守護制度の研究』上・下、（東京大学出版会、一九六七）・『鎌倉幕府守護制度の研究』諸国守護沿革考証編（東京大学出版会、一九七一）

(5) 小川清太郎著『検非違使の研究・庁例の研究』のこと。

(6) 辻 善之助（一八七七一—一九五五）東京帝国大学卒。東京帝国大学史料編纂掛、東京大学教授、同史料編纂所教授兼任、聖心女子学院専門学校教授、立正大学教授。日本仏教史。『田沼時代』（日本学術普及会、一九一五）・『日本仏教史之研究』（金港堂、一九一九）・『日本仏教史』（岩波書店、一九四四—一九五三）

す。そしたら「竹内君が調査して歩いたら、九州中が真っ赤になったそうだ」と。

その時におっしゃったのが、たぶん九大の文化史研究所の戦後の紀要の一号でしょうけれども、竹内さんが対馬の調査をやったわけです。対馬の中世文書が残っているでしょう。行って一、二年で目録を二冊ぐらい出したのです。そうしたら、岩生先生が明治時代に星野先生とか何とか先生が太政官布告を出してないかと言って出させたものよりも、竹内君が行って一年で中世文書を多く発掘したと。歴史というのは足で歩いて書かなければいけないと、竹内君のよりに調査しなければだめだと盛んに言われました。

僕は、卒業してから九大の秀村選三先生⁽⁷⁾にお世話になりました。九州で文部省史料館の講習会をやったときに秀村さんを講師に呼んだのです。こちらは、ここで秀村先生に九州を教えてもらおうという下心です。そうしたら、秀村先生がおっしゃったのは、竹内先生が着任してからとその前で九州の県史・市史の中世編のレベルがだいぶ違ったということなのです。

小田 そんなに影響力があつたのですか。

藤村 はい。それで、竹内さんが九大にいる間は中世文書が発見されたと言ったら、竹内さんのところへ全部自動的に報告が来たというのです。それで、天草かどこかへ秀村先生の師匠の宮本又次先生⁽⁸⁾と竹内さんが二人で調査に行つて、秀村先生が助手でついていたそうです。そうしたら、竹内先生のことですから、必死になって中世文書を写すわけです。たぶん森克己さんが持ち主の話し相手をして、場をもっていたと思つたのですけれども、宮本先生が「竹内さん、ちょっと鉛筆を貸してください」と竹内先生の使っている鉛筆を手に取り、真面目くさつた顔をして「普通の鉛筆ですな。竹内さんがあんまり中世文書を書かれるので」と言つたといつのです。

それから二、三年して宮本又次さんが『小野組の研究』を書かれて、それに飛脚の史料が入っていたので宮本さんの弟子を通じて見せてくれないかと言ったら、宮本さんがうちへ遊び

(7) 秀村 選三(一九二二—)九州帝国

大学卒。九州大学教授、久留米大学教授。『日本社会経済史』、『幕末期薩摩藩の農業と社会 大隅国高山郷土守屋家をめぐって』(創文社、二〇〇四)。

『森俊蔵日露戦役従軍日記』(高志書院、二〇〇四—二〇〇六)・『筑前福岡藩史料雑纂』(九州大学出版会、二〇〇六)

(8) 宮本 又次(一九〇七—一九九一)京

都帝国大学卒。九州帝国大学教授、大阪大学教授、関西学院大学教授、福山大学教授。『日本経済史』、近世商業史。『株仲間の研究』(有斐閣、一九三八)・『日本近世問屋制の研究』(刀江書院、一九五一)・『小野組の研究』(新生社、一九七〇)

に来いとおっしゃって、仕方がないから行ったのです。宮本さんとは初対面なのに一番初めに言われたのは、「君は竹内君に習ったか」です。ですから、岩生先生がしかじかかようかようでございますといったのです。そうしたら、宮本さんが、「竹内さんはすごい人ですね。古代から近代まで全部やるからね」と。佐賀大学にいた弟子が江藤新平について書いた時に、竹内さんが史料を見ているから全部手を入れたというでしょう。

還暦になって東海大学へ僕が非常勤で行ったら、竹内さんの弟子がいたのです。非常勤のお接待の時、何をしゃべればいいか困ったのです。だんだん聞いたら竹内さんの弟子だと言うので、これだこれだと思って、「竹内先生の授業はいかがでしたか」と言ったら乗り出してきました。福岡の方ですから、「竹内しえんしえんがここへ座って、僕がここへ座ってね、竹内しえんしえんがこう言っ僕がこう言っ」と、こちらは「はあ」と聞いていたのです。

秀村先生にその話をしたら、大学院が始まったばかりの時で大学院生はあいつだけだったと。秀村先生は宮本又次先生の助手だったので聞いているのは二人だけで、竹内さんは君は助手だから報告しなくていいと言ったというのです。今になったら、あの時、報告しておけばよかったと盛んにおっしゃっていました。

とにかくあの竹内さんというのはすごいものです。竹内さんは、美術史の誰かが書いていたけれども、戦争中は昼飯はコッペパンを食べて水を飲んで、古文書を見て動かなかったというのです。

これも大学と関係しますけれども、佐藤進一先生が辻善之助の最後の年に一年生になったというのです。そうしたら、辻さんが日本仏教史の講義をやって、講義で原稿を作って手を入れておられたそうです。最後の年だから日本仏教史講義を終わらせるために、演習も講義だというのでやった。その三年生の時に法学部の石井良助さんが非常勤でおいでになり、授業を受け

たということです。佐藤先生は卒業論文に専念するつもりで、二学期はもう出ないつもりだったというのです。だけれども、お世話になっていてというので二学期に出たら、悪いことに文学部の人がみんな逃げて、石井さんは佐藤先生一人しかいなくて、一対一で全部講義を受けたそうです。

石井良助先生は、岡山だったかで史料館の講習会をやる時に国鉄がストライキをやりそうだったので、石井さんが来る時に集まらないおそれがあったらしいのです。それで、僕の上役が止めましようかと言ったら、石井さんが、「佐藤君一人の前でやったんだ。だから、誰か一人来たらやる」と言っただけです。

秀村選三先生はよく石井さんのところへ行っていましたけれども、秀村先生によると、石井さんは点数が辛いのので有名で、石井良助ではなくてあれは「石井良くれ」だというあだ名がついていたというので笑っていました。だから、東大法学部の法制史資料室で中田薫さん⁽¹⁰⁾と石井さんが集めた古文書、それから、江戸東京博物館に石井さんが集めた古文書が入っています。専修大学と。あれで見ると小田さんのおっしゃるとおりで、石井さんがご自分で買い込んでいます。だから、この世界というのは古文書をじかにいじっていなければだめでしょうね。

佐藤先生は新城常三先生⁽¹¹⁾から伺いましたけれども、学生は史料編纂所で影写本、六冊から十冊しか貸さない。だから、旧制新潟高校の先輩が史料編纂所員で、所員はそれより多く借り出せるから、佐藤さんはその先輩を通じて学生の時から部屋へ借りに来て、最敬礼をして帰ってきて全部読んだということです。

僕の前に佐藤さんの演習を受けた佐々木銀弥さん⁽¹²⁾が佐藤さんが中央大学を辞める時に送別の辞を書いていまして、その中で我々が学科別の対抗の野球をやって焼酎を飲んで帰る時に、東大の前を帰ると史料編纂所の地下室だけは必ず電気がついていました。佐藤先生は戦後の一時期

京帝国大学卒。東京大学教授、新潟大学教授、専修大学教授、創価大学教授。日本法制史。『徳川禁令考』校訂（創文社、一九五九—一九六一）。『日本法制史概説』（弘文堂、一九四八）、『刑罰の歴史』（明石書店、一九九二）

(10) 中田 薫（一八七七一—一九六七）東京帝国大学卒。東京帝国大学教授。日本法制史。『徳川時代ノ文学ニ見エタル私法』（明石堂書店、一九二五）。『庄園の研究』（彰考書院、一九四八）。『村及び入会の研究』（岩波書店、一九四九）

(11) 新城 常三（一九一—一九九六）東京帝国大学卒。東京帝国大学史料編纂所員、北海道大学教授、九州大学教授、成城大学。交通史。『戦国時代の交通』（畝傍書房、一九四三）。『鎌倉時代の交通』（吉川弘文館、一九六七）。『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』（塙書房、一九八二）

(12) 佐々木 銀弥（一九二五—一九九二）東京大学卒。中央大学教授。日本中世

史料編纂所に住んでいて、勤務が終わった後、出てきて古文書を読んでいた。我々のようにいかないと書いていました。

これは佐藤先生に直接聞きましたけれども、「先生、お帰りになってからもおやりになったんですか」と聞いたら、卒業後入所された頃は今のように入所したというやがましいことがないので、本郷の前の玄人下宿に下宿なさって、ご飯を食べたら、先生は影写本を出しておいて夜中まで見たというのです。夜中に帰る時は正門が閉まっているので塀を乗り越えて帰ったというのです。やはり私なんかとはできが違うので、やはり偉い先生というのは大変なものだと思います。

3. 恩師岩生成一先生の思い出

藤村 岩生先生で忘れられない思い出は、今になったら恥ずかしいのですが、習った時は、今から考えたら先生が五〇歳になるかならないかです。それが僕なんかは二〇歳前後ですからじじいだと思ってるわけです。羽原又吉⁽¹³⁾という人が日本の昆布の中国への輸出について、こんな本を書いていますが、羽原さんとかいうおじいさんが書いてますね」と言ったので、我々は「あれ？ 岩生さんはじいさんだと思ってるんじゃないんだ」とか言って笑ったのです。笑った学生が八〇歳を超えました。ですけれども、その時、岩生先生が「自分は頭が悪いから人が一日でやることを二日でやる」と。これはもう耳にタコができるほど言われました。今になると先生の勉学の程が身にしみて感じられます。

僕の原点は、恥ずかしい卒業論文を書いて自分でも困ったと思ったのですけれども、卒業させてくれたのです。出してくれたので、お礼に岩生先生のところへ行ったら、昭和二〇年代の物がない時に先生が今日は日仏会館でワインをもらったという。長崎貿易の専門家ですから、

史『中世商品流通史の研究』（法政大学出版局、一九九〇）・『日本中世の都市と法』（吉川弘文館、一九九四）・『日本商人の源流』（ニュートンプレス、一九八一）

(13) 羽原 又吉（一八八二—一九六九）東京帝国大学卒。北海道庁水産調査部員、水産講習所（現東京水産大学）教官。漁業経済史。『アイヌ社会経済史』（白揚社、一九三九）・『日本漁業経済史』（岩波書店、一九五二—一九五五）・『日本近代漁業経済史』（岩波書店、一九五七）

オランダの大使館からサーデインの缶詰をもらったから食べさせてやるというわけですよ。

それはよかったのだけれども、その前に座らされて真綿で首を半時間ぐらい締め付けられて、「君の卒業論文は」と来たから困ったわけですよ。思いつきで物を書いてはいけません。これが僕の欠点です。ですから、私はオランダ貿易をやらなかったですし、飛脚もまとまっていませんけれども、困った時に佐藤先生や岩生先生の言ったことは一種の定点というのですが、自分がどういう位置にあるか把握するのに参考になりました。

そういった先生が七〇歳前になってお年始に行ったら、深刻な顔をして、「僕も七〇歳近くになって、何とかさんも何とかさんも八〇歳になったら頭がボケてきた」と言うわけです。その時、覚えているのは『南洋日本町の研究』の改訂をやらなければいけない。『南洋日本町』の続編を書かなければいけない。それから、『朱印船貿易史』の改訂版をやらなければいけない。それから、もう一つは長崎の中国貿易をやらなければいけない」と言って、五か六くらいの仕事をあげ、先生が焦ったのです。

こちらは何しろまだ壮年ですよ。何だ、先生は「一日でやることは二日でやって急いではいかん」とお説教したのにこんなことを、とびつくりしたのですけれども、先生は八七歳で亡くなったかな。八〇歳を過ぎた時にやっていなかったのは一つだけで、全部やったのです。先生は確かあの時おっしゃって、中国貿易がまだですなと言ったら、「うん、あれは永積洋子君⁽¹⁴⁾がやることになってる」と。

それから、これはしよっちゅうしゃべっていただけども、終戦まで台北帝大ですから台湾からの引揚者ですよ。それで、外地から帰ってきた先生は、みんな研究図書や史料を置いてきたでしょう。岩生先生は学生が台湾から帰る時に竹の柳行李に研究図書に必要な本を入れて、お金を渡して、日本に帰ったらうちの親せきへ送ってくれというので、ほとんど全部日本に送ったのです。その時は感激しなかったけれども、創価大学へ行って農業経済の先生がやはり台湾か

(14) 永積 洋子(一九三〇-) 東京大学

卒。中央大学講師、東京大学教授、城西大学教授。近世通行貿易史。『近世初期の外交』(創文社、一九九〇)・『平戸オランダ商館日記』(講談社、二〇〇〇)・『朱印船』(吉川弘文館、二〇〇一)

らの引揚者だったのです。この方がおっしゃったのは、帰ってくる時、重量制限があるのでグラニュー糖のとびつきりの缶詰をギリギリいっぱいのところまで持って帰ってきて、それを売って戦後は飯を食べたという話でした。

岩生先生は本はそうやって送っておいて、今度はオランダへ行った時、ハンドライティングをしているのです。今はマイクロフィルムが史料編纂所へ来ていますけれども、これが重量制限をオーバーしたわけです。向こうへ交渉して特別許可を取って、先生がこれはしょっちゅうおっしゃったのは、重たくて一人で立てなくて、手伝ってもらったそうです。

その次に覚えているのが、普段、僕みたいな出来が悪くてオランダ貿易をやっていない人間です。それからしゃべらなかつたですけれども、先生がよほどうれしかったのかベニスの文書館が資料館かに慶長年間に伊達政宗が送った文書があるわけです。

岩生さんが外務省から海外交渉関係か何かを頼まれたのです。それがうまくいったということで外務省がお礼をしたのでどうかと言ったので、「すまんけど、ベニスの文書館のあれの写真を撮ってくれ」と。原寸大のカラー写真です。

小田 その当時ですか。

藤村 はい。もう先生はうれしくて、演習の時こういう顔をしてくれていたら、こちらも助かったかなと思いました。

それから、幸田成友先生⁽¹⁵⁾が持っていた糸割符の証文を、亡くなる一月前に学生を連れて行って幸田先生が見せてくれたというのです。幸田先生が亡くなるとは思わないから筆写しなかったのだけれど、亡くなってお子さんに尋ねたら、そういうものはないと言われたと。岩生先生はあきらめきれないのです。それで、僕は史料館にいたでしょう。「お前はそういう職業だから、一橋がどこかで聞いてくれないか」と言っています。慶応と一橋が引き取っていたので、慶応と一橋と両方行ったのです。そうしたら、「ご家族の方はそうおっしゃるんですが、そうい

(15) 幸田 成友(一八七三—一九五四) 東京帝国大学卒。東京商科大学(現一橋大学)教授、慶応義塾大学教授。近代経済史。『大塩平八郎』(東亜堂書房、一九一〇)・『日本経済史研究』(大岡山書店、一九二八)・『江戸と大阪』(富山房、一九三四)

うものは入っていません」と言つのです。

ところが、先生は僕がお年始に行くたびに、十年ぐらいその話が出たのです。「幸田さんのあれがね、あつたらね」と言つのです。それで、とうとう十年目になって、僕も飛脚の史料が見たいものですから、各地の史料の目録を全部書庫へ入る前に見ていたのです。その中にあつた明治大学の刑事博物館の目録に糸割符があるではないですか。もう幸田先生のもではないけれども、これを出せば岩生先生はもう勘弁してくれるだろうと思つて、「先生、こういうものがございます」と目録のコピーをして出したのです。そうしたら、それが幸田先生のもので、それで、中田易直さん⁽¹⁶⁾が刑事博物館からコピーを渡され、そのコピーを岩生さんがもつたのです。

ですから、私はあれを見ているので、史料というのは、昔のイギリスのビールのコマーシャルではないけれども、ネバーギブアップです。絶対にあきらめてはいけません。先生がなくなられた時、旧制高校の恩師から「貴君には随分御縁の深い方でしたから」といった手紙をいただきましたね。

4. 文部省史料館の時代

藤村 それから交通と関係付けて忘れられないのは、実は交通史をやつたのは大学院が終わるくらいですから、三〇歳ちょっと前です。僕の世代というのはみな本式に就職するまで十年くらいかかったのです。僕は非常勤職員でして、山梨の農村文書を整理したけれども、ペーパーがうまくいかなかったのです。

それで上役が「これじゃあ、こいつは飯が食えない」と、なんとかしてやらないとかわいそうだというわけで、後で慶応の文学部の教授になった中井信彦先生⁽¹⁷⁾が非常勤でいまして、三井

(16) 中田 易直(一九一九―) 東京帝国大

学卒。茨城大学助教授、中央大学教

授。近世経済史、近世対外関係史。

『近世対外関係史の研究』(吉川弘文

館、一九八四)・『三井高利』(吉川弘

文館、一九七五)・『日本歴史全集

江戸幕府』(講談社、一九六九)

(17) 中井 信彦(一九一六―一九九〇) 慶

にこういう資料があるからやれという命令です。それまで飛脚なんていうものは見たことがないでしょう。だけれども、指導していただいている中井さんがおっしゃる。「中井さん」と我々も言っていたので「さん」でやらせていただきます。

中井さんが言つからやらないといけないというのでやり出したけれども、まだ三井文庫が史料館にある時代で、中井さんが出してくれたリストのものは見て写せるのですけれども、関連資料とかほかのものというものは、私には全然わからないのです。

皆目、なんともならないわけです。なんとか書かなければいけないということで、恥を忍んで書いたものが「近世中期京都順番飛脚問屋の研究」です。なお、この資料については嶋田早苗さん⁽¹⁸⁾が「三井店出入りの二軒の飛脚問屋について―三井文庫収蔵史料による概観―」（三井文庫論叢三七号、二〇〇三年）に詳細に研究されています。その時は三井の越後屋の別家というものをわかっていないのです。もっとも別家でないという説もあるようで、まだ確認していません。ところが今になってみると、大江丸の安井政胤が著した「島屋佐右衛門家声録⁽¹⁹⁾」に近江屋が白木屋の別家だということはちゃんと書いてあるのは見ているのです。

始めてからやったことは、あとは三井文庫が持っている史料館に売ったもので松阪の水谷家文書という飛脚問屋です。これは近世のものは写したのです。写したけれども、これも皆目わからなくて歯が立たないのです。

そのほかにあったものは、渋沢敬三さん⁽²⁰⁾が集めて今は国文学研究資料館に入っている日本実業史博物館旧蔵資料が文部省史料館に寄贈されて、私は手が付けられるようになって、それであの京飛脚のことがわかったのです。

わかったのですが、さあ、それで書いた後で、飛脚関係の摺物で渋沢さんがお集めになったものが入っています。最初は恥ずかしい話ですけれども、学生で授業に出ていないくせに、この現物を見なければいけない、現物を見る、現物を見るという宝月先生の言葉で上級生が替え

応義塾大学卒。杉野女子短期大学教授、慶応義塾大学教授、愛知大学教授、三井文庫長。近世経済思想、農業思想。『幕藩社会と商品流通』（塙書房、一九六一）・『転換期幕藩制の研究』（塙書房、一九七一）・『色川三中の研究』（塙書房、一九八八・一九九三）

(18) 嶋田 早苗（一九三八―）横浜市立大学卒。日本近世史。三井文庫研究員。『三井文化人名録』（三井文庫）共著『三井八郎右衛門高棟伝』（東京大学出版会、一九八八）

(19) 定飛脚問屋島屋の草創と発展を記述。天明七年序。以下は家声録と略す。

(20) 渋沢 敬三（一八九六一―一九六三）東京帝国大学卒。第一六代日本銀行総裁、大蔵大臣（幣原内閣）。民俗学。『祭魚洞雑録』（郷土研究社、一九三三）・『祭魚洞雑考』（岡書店、一九五四）・『日本魚名の研究』（角川書店、一九五九）

唄を作りまして、淡谷のり子の『港のブルース』だったか何かのメロディで、最後の歌詞が「原本を見ましよう、念のため」というのがあるのです(笑)。

岩生先生なんかもそうでした。写しを見てもそれは何を見ても、現物を見ないといけない。私は現物主義を誤解して、活字とか摺物というのは興味がないのです。現物を墨で書いたものに勝手に限定していたのですね。

史料館でしたから創設期の地方史研究会の事務所が史料館にあつて、実務は史料編纂所でありましたけれども、割合に地方史誌が寄贈されたのです。それを見て史料館でも集め始めました。その飛脚のところのコピーをやり出したら、国立でも文部事務官で、教官ではないですから、研究経費になっていなかった。私はその来たものをコピーするものですから、コピー代がかかるといので上役の機嫌が悪くなるのです。だけれども、最初はコピーできないから全部筆写しましたけれども、さすがにあの『福島県史』・『福島市史』の飛脚のところは量が多いのでできなかったです。これは国文学研究資料館になって、教官になりやかましく言わなくなつてからやりました。

その時は、土曜日の午後しか空いていなかったので、慶応義塾図書館が身分証明書と十円を持って行つたら見せてくれたのです。そこで地方史誌を見ていたら、「杉本茂十郎の研究」を書いた伊東彌之助⁽²¹⁾さんが「ちょっと来い」というわけです。副館長で偉い人です。東京の方で大変人格が高潔な方でしたから、円満な方で、「君はどうもこうやってカードをめくっているけれども、どうも見ていると、カードの引き方がわかっていない」「索引の引き方もどうもあまりうまくなさそうだ」と。君は何をやっているのかと言つので、「然々斯様々々です」と言つたら、では、私が探してやると。

今になってみたらありがたい話ですけども、それも若気の至りで、三十そこそこですから、「はあ」とか言つて平気だったので。お話を伺いましたが、ある時「政府の仕事をする

(21)

伊東 彌之助(？—一九八八) 慶応義塾大学卒。慶応義塾図書館副館長。日本経済史。『慶応義塾図書館史(慶応義塾大学三田情報センター、一九七二)・「連雀町、連雀座、連雀商人」(三田学会雑誌三九卷六号、一九四六)・「杉本茂十郎の研究—菱垣廻船積仲間の成立」(三田学会雑誌四七卷九・一〇号、一九五四)

のが一番儲かるんだよ」と言われました。僕は随分いろいろなことを教えてもらったけれども、分からないから、それをこちらがよう聞かなかったのです。また、同館の白石克⁽²²⁾さんにも教えていただきました。

今度は国文学研究資料館になって「コピー」がとれるようになって、それ以前に比べて問題になってきたことは、「コピーをとった分と、お金がないのと暇がないので筆写した分の両方できて、自分で取り扱いが変わってきます」と、「コピーしたのを見ると、あれ、この後ろはどうなったか、この前がもうちょっとあったのではないかということが起こるのです。

恥ずかしい話ですけれども、国文学研究資料館になってから『東京市史稿』を、文句を言われないから頼着せずに「コピー」をして、それで国文を退職してから「おまえのあだ名はどう付いていたか知っているか」と言うから、「分かるもんか」と言ったら、「コピーの王様と聞いているぞ」と言うのです（笑）。辞めた後で見られないようになると怖いから、「コピー」していると言いました。

それから通信博物館で『駅通志稿』⁽²³⁾の基になった史料を閲覧し、マイク口化したものを宿直の時にリーダーで筆写しました。同館では資料官の橋本輝夫⁽²⁴⁾さんが親身になって指導してくれました。

また大阪経済大学日本経済史研究所と大阪市史編纂所では黒羽兵治郎⁽²⁵⁾先生にご指導いただきました。その際、藤本篤⁽²⁶⁾さん、野村君代⁽²⁷⁾さんからもご教示をいただきました。

その頃から仙台の高倉淳⁽²⁸⁾さん、福島金子一郎⁽²⁷⁾さん、越後湯沢の桑原孝⁽²⁸⁾さん、三井文庫の方々、彦根の滋賀大学附属史料館の方々と原田敏丸⁽²⁹⁾先生にも大変お世話になりました。また藪内吉彦⁽³⁰⁾さんから郵便史について伺いました。交通史研究会でも教示いただきました。

(22) 白石 克（一九四三—）慶応義塾大学卒。慶応義塾図書館員。平成帝京大学教授。『広重東海道五十三次―八種四百拾八景』（小学館、一九八八）

(23) 駅通志稿 明治十二年（一八七九）駅通局長前島密が同局御用掛青江秀に命じて編纂させた日本の駅通史。くわしくは『大日本帝国駅通志稿』。覆刻本では『大日本交通史』という。同十五年刊。駅通志稿と同考証との二部より成る。

(24) 橋本 輝夫（一九二六—）専修大学中退。通信博物館研究官。郵便史。『前島密半生記（行き路のしるし）』（日本郵政出版、一九八六）・『日本郵便の歴史』（北都、一九八六）

(25) 黒羽 兵治郎（一九〇四—一九九二）

5. 国文学研究資料館での思い出

藤村 私は創価大学へ行く前に、『東京市史稿』の経済篇は飛脚と名のつくものはコピーをやっていたのです。そうしたら、後で申します創価大学へ行ったら創価大学は『東京市史稿』がありません。それで、臨川書店がリプリントで出したのでしよう。図書館に行ったらリプリントを買ってくれと言ったら買ってくれることになったのです。

国文学研究資料館が立川へ移ってから、市街篇とか新しく入るものは国文学研究資料館で見えますけれども、やはりもの足らないのです。だから、恥ずかしい話ですけども、臨川書店が出したリプリントの『東京市史稿』の経済篇を再度コピーしました。

それから市街篇の明治のところは、初めて見ました。そこで、東京都政史料館が持っている資料だと思つのですけれども、明治の初めの定飛脚問屋の島屋は江戸と上方の営業をやっていますね。ちょっとびつくりしました。

これを始めた頃は、地方史誌類を見ている、月に一回、飛脚関係があればいくくらいです。辞める頃になってやっと毎週一点くらい見つけるといいますが、そんな調子だったので。

小泉純一郎元首相がよくないと思ったのは、彼は「みんながちゃんと張り切ってやっていないから、改革しなければいけない」という論調でしょう。人も金もくれないのをボロが出ないようにならなくてカバするか、みんな一生懸命やっているのにといい声は国立のいろいろな機関で聞かれました。

国文学研究資料館ができた時に図書館短大を出て、すぐに司書になった人たちが養成された。国文学研究史料館で長く勤めている人たちもみんな、もう二年たちましたら全部いなくなるのです。私にすればこの人達からも世話になっているのですが、仕方がありません。

結局、僕は東大経済学部の図書室に行つて白木屋文書などを見せてもらった時に、東大の先

- 京都帝国大学卒。大阪商科大学教授、大阪経済大学教授、大阪府立大学教授。日本経済史。『大阪地方の船仲間』（湯川弘文社、一九三七）・『近世交通史研究』（日本評論社、一九四三）・『近世の大阪』（有斐閣、一九四三）
- (26) 藤本 篤（一九二八—）山口大学卒。大阪市史編纂所長。日本近世史。『大阪市物語』（松籟社、一九九三）
- (27) 金子 一郎（一九二七—二〇〇九）（旧制）福島経済専門学校卒。郵便史。福島郵趣会長。『福島県史』（共著）・『福島市史』（共著）
- (28) 桑原 孝（一九三一—）政法大学卒。魚沼文化の会会長。近世交通史。「近世における雪と交通—越後の街道を手掛りに—」（『交通史研究』第三七号、一九九六）
- (29) 原田 敏丸（一九二七—）神官皇学館大学卒。九州大学卒。大分大学助教授。滋賀大学教授。大阪大学教授。帝塚山大学教授。日本経済史。『近世入会制度解体過程の研究』（塙書房、一九六九）・『近世村落の経済と社会』（山川出版社、一九六三）
- (30) 藪内 吉彦（一九二六—）（旧制）豊中中学校卒。大阪高麗橋郵便局長。郵便史研究会長。郵便史。『日本郵便創業史』（雄山閣出版、一九七五）・

生ではないのですけれども、昔、東大に關係なさった方なんかから聞きますと、土屋喬雄先生(31)もそれはお偉かったけれども、あそこ(30)の司書で法政大学の夜学へ行つて経済学を勉強した方が、土屋先生に現物の本を買つて来いと勉強させられるわけです。その人は本好きで走り回つて集めたと言つのです。だから、偉い先生はそれは大変(30)立派ですけれども、サポートする支援集団がいないと、はつきり言つてあんなに偉い先生は絶対に出来上がるはずがないのです。

国文学研究資料館に入つて私が一番勉強になつたのは、日本史ですから書誌学を習つていないわけです。国文の人は書誌学でしょう。市古貞次先生(32)が来たわけです。

「ご機嫌のいい時に横で話しているのを聞いていて、やはりプロというものは怖いものだと思ひました。やはり習う時には本物に習わないといけない」ということは、骨身に染みしました。

耳学問でしたが、小田さんもご経験でしょうけれども、ありがたいことに国文の人は平仮名は読めるけれども、漢字はあまり読めないのです。「こちらは平仮名は全然わからないわけです。ですから、気心の知れた本田康雄(33)さんのところへ行つて、平仮名を全部呼んでもらうのです。彼は彼で漢字を持ってきて「おい、これを読め」と言つので、柿の種と握り飯の交換です(33)。国文の教員と付き合うよりは司書で本が好きなのと付き合った方がよっぽどいい時があるかと教えてくれました。

それでやっているうちに、市古貞次さんがさすがだと思つたのは、渋沢のコレクションには明治の錦絵がごまんとあるわけです。国文の人に、ああいう錦絵のこれだけのコレクションがまとまつているのはごこしかないから、行つて見せてもらえとみんな言われていました。

あとで考えると、実業史博物館の飛脚関係の摺物というものは、これは『御触書集成』と同じで、幕府はあの御触書で全国に広めるでしょう。商売人は御触れではないけれども、このちらして自分の営業範囲とか、広く見れば全国にこれをばらまいていっているのではないかと。だから、摺物を集めてやったら飛脚の御触書集成のような役割を持てるのではないかと、それで僕

『日本郵便発達史』（明石書店） 2000

(31) 土屋 喬雄（一八九六一—一九八八）東京帝国大学卒。東京帝国大学教授、明治大学教授、駒澤大学教授、日本経済・経営史。『封建社会崩壊過程の研究』（弘文堂書房、一九三〇）・『日本資本主義論集』（育生社、一九三七）・『封建社会の構造分析』（勤草書房、一九五〇）

(32) 市古 貞次（一九一一—二〇〇四）東京帝国大学卒。東京大学教授、国文学研究資料館館長。中世文学。『中世小説の研究』（東京大学出版会、一九五五）・『中世小説とその周辺』（東京大学出版会、一九八一）・『中世文学年表』（東京大学出版会、一九九八）
(33) 本田 康雄（一九三〇—二〇〇九）東京大学卒。金沢大学助教授。文部省教科書調査官。国文学研究資料館教授。埼玉短期大学教授。『式亭三馬の文芸』（塙書房、一九七三）・『新聞小説の誕生』（平凡社、一九九八）

は翻刻を始めたのです。

その頃になってくると、京屋の宰領⁽³⁴⁾が随筆か何かを書いて、国文の者はそれを文学者として扱っているわけです。僕は全然知らないのです。

彼が自伝みたいなものを書いていまして、そこで「はあ」と思ったのは、自分の家は日蓮宗だった。親父は日蓮宗の檀家のはずなのに浄土真宗のお寺の墓へもお参りに行っていたのです。

筆は一本、箸は二本以前の時代ですから筆だけで食べられるはずはないのですけれども、宰領を辞めて筆でなんとか食べられるようになったのでしょうか。記憶ですからはっきりしませんけれども、当然、自分のやっていたポストは知り合いか親戚かに譲ったのでしょうか。自分はそこから離れたから、旦那寺は親父が行っていた浄土真宗に変えたと書いているのです。

僕が思うに、定飛脚問屋の近江屋が浄土真宗で、近江屋が闕所になるでしょう。闕所になって京屋の飛脚問屋の宰領になった。そうしたら、飛脚問屋と宰領の関係は白木屋と近江屋が本家・別家のような関係ですから、別家でなくても系列会社の社員ですね。だから、飛脚問屋が日蓮宗なので日蓮宗に変えたのではないかとという推測です。

これはやはり本を読まないといけないと。それから「家声録」を書いた大伴大江丸⁽³⁵⁾が俳句を読むでしょう。ところが僕は俳句なんていうものは、言葉のあやとか何とかは全然分からないほうなのです。

国文の友達に僕はわからないけれども、この人が飛脚問屋をやっているんで、ちょっと早く何を書いてくれるか教えてくれないかと頼んだのです。そうしたら、彼がこれは活字があると教えてくれたのです。そうしたら、その頃はまだ『日本名著全集』という小さい本がありますね。あれの俳句のところこれがあるぞと見せてくれたのです。そうしたら、序文のところを見ると、自分の子どもの時、親父は北国問屋で、親父は死んだと。それでなんとかがかんとかやって

(34) 宰領 荷物を運送する駄馬や人夫を引き連れ、その指揮・監督・警衛にあたる役職。

(35) 大伴大江丸(？ー一八〇五)江戸時代中期の大坂の俳人。本姓安井。名は政胤、通称善兵衛、前号旧国。大伴と名乗ったのは住居が大伴の浦近くであったため。家業は三度飛脚の問屋で大和屋と号した。俳諧は余技。

いるうちに、親父の縁で島屋⁽³⁶⁾に採用されて入った。これは「家声録」に全然出て来ない記事が、その随筆の俳句の本のほうに出てくるのです。これはやはり、国文学を読まないといけないと思いました。

読まないといけないのですけれども、やはり文学鑑賞というものはいけませんね。それでも推理小説のほうで面白いというような人間でしたが、そうしたら俳句の専門家で現在立教大学教授の加藤定彦⁽³⁷⁾さんが国文学研究資料館の助手で来たのです。

本が好きだと言つので彼と仲良くなりました。それで、話をしていたら俳句をやっていると
言つわけです。そうしたら悪いことにこちらは俳句なんてものはわからないから、整理した文書の山梨の農村だつたら幕末になつたらみんな日本刀だとか漢詩、国学などに凝るけれども、その前にみんな俳句をやるわけです。わからないので整理は十把一絡げと言つたら、笑われま
した。(笑)

そんな調子でしたけれども、向こうは農村文書の中に俳句があるということはあるし知らないわけです。「おまえ、こんなものがあるぞ」と言つのです。それから、愛知県なんかの地方誌を見ると俳句が盛んですから、史誌を見るわけです。それから作家の堀田善衛ですが、彼の自伝小説を読むと、あれは富山県か富山に近い石川県の人でしょうか。うちには芭蕉は来ないと言つたら、おばあさんが「うちは京都のなんとか派だから、芭蕉さんはうちへは来ざつた」と言つたということです。俳諧と地方史も飛脚と関係してきたのです。

大江丸の子孫の家が上方にあつて、布村耕路が雑誌『上方』に紹介しているのです。上田さんが持っているというので、大阪の今、KKRという公務員の宿屋がありますね。僕はあれの小さいところへ泊まつていて、あの頃は大阪の電話帳はこのくらいのもんです。十円玉をこんなに積み上げて上田という、高知県だとこれは「アゲタ」とも読むのですが、「ウエダ」だろ
うというので、最初から十円入れてはかけたら、十人目くらいで引がかつたのです。「昔、

(36)

島屋 江戸の定飛脚問屋。大坂の組合店が元禄十四年(一七〇一)に作った江戸の飛脚宿で、手板組・金飛脚といわれた。江戸瀬戸物町に本店を置き、上州・奥州・函館・越後などに分店を展開した。水戸藩の御用を勤める。明治期に陸運元会社に参加。

(37)

加藤 定彦(一九四七-) 早稲田大学卒。立教大学教授。日本近世文学。『初期俳諧集』(新日本古典文学大系、岩波書店)

こういうものを書いていて、上田さんがお持ちだということになっていきますが、失礼ですがあなたですか」と、「ああ、私でございます」と言つのです。ダイエーの発祥の干林ですね。あそこへ行ったのです。そして見せてくれました。向こうは大丸の時は鳥屋が全盛だったけれども、鳥屋が化政期になって左前になりますね。その前後におそらくうまくいなくなつて、その家は鳥屋の組合から抜けているのだらうと思つのです。

なお、「千嶋講定宿附」(『道中記集成』第四二巻所収)に廻船問屋の内に大坂の「長堀玉造 ばし 今嶋屋佐右衛門」とあります。鳥屋の左前と廻船との関係が気になりますが、これは今後の問題です。

明治になって女の子が独りっ子で生まれて、上田家の独り子の男と結婚したわけです。子どもが生まれたので、上田になった。うちは日蓮宗だけれども、浄土宗のお寺に大江丸のお墓があるので、お参りに行っていたと言つのです。

上田高嶺さんが公認会計士で、大阪で黄綬褒章をもらったことのある方です。高嶺さんが明日事務所来いと、「コピー機があるからコピーしてやると言つのです。その時は今になったらバカですね。「きのふの我」は全部コピーしてもらつて、それで系図もコピーするという時に、紙が足りなくなりました。紙はあると言つのですが、まだ封を切っていないのです。

こちら封を切らせるのが悪い、一枚五〇円くらいの時代ですから、遠慮してその残っている紙を利用してコピーして帰つて来ました。今になると言つてくださったとおりにすべきだったと思います。

その大江丸のコピーを持ってきて帰つてきましたが、平仮名で書いてあるから歯が立たないわけです。なんとかしようと思つたけれども、どうにもならないのです。

困り果てていたら、誰かが早稲田の大学院でこの平仮名を読める田中善信さんが、俳句をやっていると云つたわけです。前半を渡して書いてもらったわけです。そうしたら、転動したの

です。田中さんの後輩で前記の加藤定彦さんを紹介してくれました。後の分をすまないけれども見てくれと渡したのです。おかげで、めでたく両方そろったわけです。

史料館研究紀要に活字にしようという時に、その頃はなんとなく館員以外の名前を出すのはいけないという雰囲気を感じました。大変申しわけなかったけれども、僕の名前で後書きに二人に大変お世話になりましたと書きました。今になっても申しわけないことをしたと思います。

6. 創価大学の頃

藤村 国文学研究資料館は大分しゃべりすぎましたので、簡単にやっていきます。創価大学に入りまして梅村又次⁽³⁸⁾という一橋大学からおいでになった先生とご一緒になりました。近代史を学生時代にやっていないものだから、ざつくばらんに教えていただいたのです。

飛脚の資料というのは当然のことですけれども、天保の改革だとかというときにお上から言われて組合の規則が改正になるとか、取り調べに対する答申とかかたわで残るわけです。ですから、幸田成友が書いていますけれども、天保の改革から明治に至るまで、資料というのはあまり残っていないわけです。

そのあたりが分かりませんと言ったら、「明治になって新政府ができる」と薩長の人たちが役人になる。新しい法令を出すから、出す本人も初めてなので説明が付く。だから明治一〇年代くらいまでの法令全書と官報を見る」と。それで明治の初めがどういふものかということを確認して、天保くらいまでの幕末は逆に考えても構わないだろうということを言われました。

法令全書の復刻版が明治十年代まで創価大学にありまして、図書館を探したら、官報が一号から並んでいるのです。うれしくなって開けましたら韓国の官報でがっかり来ました。だから

(38)

梅村 又次(一九二一—二〇〇六)一橋大名誉教授。農業経済学。「長期経済統計・推計と分析」(東洋経済新報社) (東洋経済新報社、二〇〇九)・「梅村又次先生遺稿集」(一橋大学経済研究所蔵、二〇〇七)『開港と維新』(梅村又次、山本有造編、岩波書店、一九八九)・『労働力』(梅村又次「ほか」著、東洋経済新報社、一九八八)

いまだに見ていません。

創価大学に勤めていて不覚だったのは、「郵便報知新聞」⁽³⁹⁾の復刻版が創価大学中央図書館にあるのです。これを僕は見ていなかった。今、行って見ている次第です。

創価大学で一番勉強になったのは、飛脚の勉強とは外れませんが、数量経済史で新保博先生⁽⁴⁰⁾が書きになっていることで、新保先生にもお世話になりましたけれども、数表と数式が出てきます。ところがだいたい数学が嫌いだから文学部に行ったので、梅村先生に「歯が立ちません」と言ったら梅村先生が「分かるところだけ読め」と「分かるところだけ読んでこれが当たっていいではないかと思つところをあなたは勉強すればいいのだ」と言われまして、これはありがたかったです。

僕は新保先生の本をやつととつづく気になりまして、小田さんのおかげで新保さんのリストをいただきまして、創価大学の書庫へ行って、一生懸命またコピーを集めている最中でございます。

7. 飛脚問屋の経営

藤村 次に飛脚問屋の経営に参りますと、飛脚問屋の経営と言ったときにざつとばらんに言うと、分からないということが分かったということが本音です。その代わり宿駅制度のなかの営業ですから、当然、道中奉行の管轄下に入る。宿ごとに行くときには各宿の問屋場と人足問屋と、紀州とか雲州なんかだったら本陣が飛脚の取扱所になります。この三つの関係です。これをつかまないと分からないだろう。

これが私の一番まずいところだったのですが、三井の資料から入って私は町人の資料ばかり思っているわけです。だから『守貞漫稿』⁽⁴¹⁾にある三度飛脚の説明が百パーセント通用する

(39) 郵便報知新聞 明治五年(一八七二)六月十日創刊。当時の駅通頭前島密が発起し、部下の小西義敬に発行させた。はじめ半紙二ツ折り木版印刷の冊子形で月五回刊。翌年六月から洋紙印刷の日刊となる。この新聞は全国の郵便組織を活用してニュースを集めたので、地方色が豊富であった。

(40) 新保 博(一九三二—二〇〇二)慶應義塾大学卒。神戸大学教授。日本経済史『封建的小農民の分解過程』(新生社、一九六七)・『日本近代信用制度成立史論』(有斐閣、一九六八)・『近世の物価と経済発展』(東洋経済新報社、一九七八)

(41) 守貞漫稿 喜田川季荘(守貞)の著し

というかたちでものを考えているわけです。そして『御触書集成』に出てくる三度飛脚関連の法令を、僕は吉川弘文館の概説でも書いて、辞書にも書いて申し訳ないのですけれども、僕は町人の飛脚で武家を請け負うというかたちで適用される法令だと理解していたのだと今になって思います。恥ずかしい話です。だから法令を解釈するときに、法令の適用範囲はどの範囲に對して法令が出ているかということも僕が理解していなかったわけです。この点は「御番衆定飛脚濫觴」(『近世交通史料集七 飛脚関係史料』所収)からすると、江戸の飛脚仲間が当然相對での運送業者です。これが京坂両地の御番方飛脚(大阪城・二条城御番方の荷物を扱う)を請負い東海道各宿で月三度馬三疋を使用します。その御状箇(荷物)は御番方荷物と一般の請負荷物とを取り交えたものです。

御番方荷物のみでは三疋は必要ではなく、飛脚側は赤字になる。「御番衆定飛脚濫觴」(『近世交通史料集 七』所収)にある御百騎方御在番中御宿状往返飛脚も三疋で同様だったのではないのでしょうか。

その後、天明四年(一七八四)に定飛脚問屋仰付けとなり、御定賃錢による運送になるが、おそらく従前から荷物を取り交えているでしょう。定飛脚問屋側は、御番方の御用向を引請けていますが、定飛脚家業として「持合」せるのだから御用荷物に売買の荷物を加えるのではありません。取り交える事を御免になっている定飛脚の荷物に番方の御用向を「持合」せるのだと解釈しており、うまく理解しにくいですが、「表を裏にしたる妙計の手際なり」「心あるもの熟誦すべし」と自賛しています。これは道中奉行と阿吽の関係でなかったらいえないと思います。

そうであるなら、数度にわたって献金して「仰付け」になっただけの甲斐はあるでしょう。しかし、道中では町人体の飛脚だから、帯刀した武家の飛脚と宿の問屋場で同時になると、定飛脚の荷物は後回しになります。これは金は鉄に勝てないということで、増賃錢をしても駄目

た、主として江戸時代の風俗に関する考証的随筆。前集三十巻、後集四巻、追補一巻、計三十五巻の大著であるが全部は伝わらず、国立国会図書館所蔵本が前集巻二および十七を欠くものの、最もよく揃っている。

です。しかし、推測ですが、少しでも自分たちの扱い荷物を優先するよう働きかけをやるでしょう。結局飛脚賃が高額化します。つまり、従来の相対の時の慣習は続いています。

この他に①諸向御用筋の御書物、②諸侯方知行所飛脚御用向、③一般の幸便も全て武家方を町方商用と取り交えて差立てます。

結局解決策としては名目を借りることになります。会符えふ（馬荷物に挿し込む「〇〇御用」を唱えた立札）です。これの乱用が問題になり幕府の咎を受けることとなりますが、前記の妙計を崩さないようにします。

妙計が宿で通用するかどうかは、定飛脚仰付けの際に出された御触の解釈如何です。

これを早飛脚の場合について「四度目再御触御願一件」（文政一三年、『近世交通史料集七』所収）で見ると、御触が出た当座はよいですが、年月がたち関係者が変わります。つまり法令を守る人間関係がかわり、「顔」もきかなくなると問題が生じます。特に新顔の宰領には馬士が増銭、酒手を要求します。その際に問屋役人も入れ替ると、馬士に良い顔をしたかったので味方にならず、結局賃銭が上昇します。

さらに宿の事情は「四度目再御触願一件」にある「山東宿々仕舞越引合之事」が参考になります。箱根山以东の各宿に交渉することになり、定飛脚問屋は利右衛門、それに早飛脚宰領二人で交渉しますが、品川宿を始め全ての宿との交渉が終わったら印形する（正式に契約）と言つてもまとまりません。小田原宿では交渉以前に内談すると「夫八以外なる御了簡違なるべし」と言われてしまいます。小田原は箱根山の麓ですから、御触書通りにしろというなら当然問屋賄は宿場到着順次第だから喜んで承知します。そうなったら、大名が先着の場合、仕舞越どころか翌日の一番越も難しい。また順番に馬を継ぎ立てるから老馬、疲馬を嫌って避けることができせん。この点について江戸早飛脚会所守と宰領が定めたのが当時の駄賃ですが、今は馬代金、飼料代共に高額になっているから、宿側では交渉の相談をしているくらいだから

「御触之御趣意通継立るとの懸合ならば歡ぶべし、否哉有まじ、併能々勘弁あれ」と言われ、宰領は当惑して「一句も出ず、閉口せり」とあります。

結局「御触之御趣意二元付、相对之仕方八問屋役江懸応対、双方合躰成して中庸を用ひ、片々からす片寄らす懸合可申旨決着せり」という。つまり玉虫色でしょう。

ほどほどのところに落ち着くため宿問屋、定番、帳付、馬指、馬持などで申し合わせています。御触書通り杓子定規にやると、順法鬪争になるから中庸にするには潤滑油が必要で、話し合われた筈ですが、実証は難しい。小田原宿が印形したら、山東の残り各宿もめでたく印形しています。この間の事情は箱根山の西の各宿でも同様で、幕末までその時期の事情により繰り返されたと考えられます。

そういうふうな理解を誤ったのは僕の責任でもありませんけれども、飛脚問屋にとっては公私がはっきりしないところにうまみがあったのではないかと。そういううまみが出るところをわざわざ書いて摘発されるような人間というのはいないのではないかな。だから、そういうところは古文書の中で出てこないのではないかと。これは論文にはとても書けません。高橋孟『海軍めしたき物語』にある「色気(ワイロ)をつける」と似た世界ではないかと思えます。

それから、実際の運用の問題になると、前に言った通り荷物の順番は問屋場の帳付に頼りません。運ぶ人足の問題になると、おそらく宿場の人足問屋から、各宿で交替しているかどうか、それは僕も分かりませんが、人足を雇うのだらうと思うのです。その場合、人足が腕の利いた人足を雇うか腕の利かない人足を雇うか、これは宰領の腕だらうと思うのです。

歴史というのはいろいろな人間が出てくる。人間の世界というのは悪い人間、いい人間と全部いるのです。それから、何がいか悪いかだっただけははっきりしないのは世の中だと思えます。僕は人間の世界で何でも全部解決できるなんていうことは絶対ないという気がしています。改革なんか何回やっても解決するはずがない。逆に上書き修正みたいな同じ法令が何度も

出ます。

同じ法令が出るというのはうまくいかないということも事実だけれども、うまくいかないけれども、ぼろが出るか出ないかくらいで動いているというのも事実だろう。それがお役人様にとつても商人にとつても運送する人間にとつても、誰が泣いたか誰が笑ったか、それは知りません。徳川三百年とは言いませんけれども、あとの二百年くらいはそれで動いていたということではないかという気がするのです。

そういうことから、飛脚問屋は支配人も宰領も顔が利かないとできない商売でしょうね。荷物をもちつたためには旦那方の機嫌を取らないといけない。動いていくためには人足問屋とかやくぎの親分にも対等に付き合えるくらい。たかられて赤字になったらこれは商売ができませんから、そのあたりが絶妙なバランスの商売ではないかなという気がします。

児玉幸多先生⁽⁴²⁾が出された「近世交通史料集」七の利右衛門が書いたものを見ると、問屋が許可になるときの免許になっている東海道の取次所の名前があるでしょう。大坂屋というのは多いのです。だからやはり大坂の大坂屋茂兵衛が、京都と大坂の飛脚問屋が江戸に対して開拓したけれども、その時に大坂屋茂兵衛というのは相当腕の利いた店だったのだらうと思います。

この他に私は上州、福島などの生系が、定飛脚問屋扱いの際に全部御定賃銭かどうかは日締帳などと対比して考えないと自信がありません。

8. 大阪と京都との関係

藤村 大阪の飛脚問屋と京都の関係ですが、これは問題だらうと思うのです。これは飛脚問屋だけではなくて、上方をどう理解するかということです。京都と大阪を別にとつて理解もあるようだけれども、ある先生から「君たちはそう言っているけれども京都と大阪は一体に考え

(42)

児玉 幸多(一九〇九—二〇〇七) 東京帝国大学卒。学習院大学教授、学習院女子短期大学学長、学習院大学学長。日本近世農村史・交通史。『近世農村社会の研究』(吉川弘文館、一九五三)・『近世宿駅制度の研究』(吉川弘文館、一九五七)・『近世交通史の研究』(筑摩書房、一九八六)

るべきではないか」と言われたことがあるのです。

大阪ができるというときに、これは小田さんにも申し上げましたけれども、東京へ行ってお相撲のある両国駅に行くときに隅田川がありますね。あの線路を列車が渡るときに、大阪の安治川と同じではないか。掘り込んだ川だ。だからみんな東京は巨大都市の成立とかいって、家康がどうしたと言っているでしょう。

考えてみたら、大阪の河内という地名自体が示しています。郷里の高知は「かわち」の音読みです。だから、川の河口のデルタ地帯に、平地にできた地形が「かわち」です。だから全国の地名で「河内郡」とあるのはみんな湿地帯です。あんなところですから、大坂城や石山本願寺ができるときに、これは堀を作らなかつたら使いものにならない街ではないですか。大阪の方の前でこんなことを言うのは釈迦に説法で、大変なことを言っています。

終戦後、覚えているのは大阪が地盤沈下だといったときに、松下幸之助さんの奥さんが堀を全部埋めてトラックを通したらいと言いました。これは逆に言ったら解で瀬戸内海から石炭を運んできて、安治川の口で解だけ離して引張って工場の横まで持って行って、工場の横で上げる。だから燃料費が安いので、京浜工業地帯は石油になるまで太刀打ちできないという、制度自体としてあれと同じことだと思つたのです。

ですから、そうなる大阪が実力をつけてきたときに京都がどうだったかというのが問題です。僕の習った岩生先生が海外交渉史をやっているのに、僕の学生のとき、『町人考見録』で町人のリストで論文を書いたのです。その時に僕は意味が分からなかったのです。何で先生はこんなことを書くのかと。

話が前後しますけれども、林基⁽⁴³⁾という先生に最近教えていただいたときに、林さんが岩生先生に卒業論文でお世話になっているのです。それで「君は岩生さんに習ったか」「はい、そうです」という返事をしている。「岩生さんは辻さんの書いた『海外交通史話』で残った問題を

(43) 林基(一九一四—二〇一〇)慶應義塾大学卒。専修大学教授。日本近世史。『百姓一揆の伝統』(新評論、一九

進めたのではないのか」と言われました。だから、辻さんの『田沼時代』とか、辻さんの坊ちゃん(43)の辻達也さんが、お父さんから「吉田東伍(44)の『徳川政教考』を読め」と言われたと書いています。お父さんの『田沼時代』とセットの本です。

結局、そうなると、大阪の両替商と京都の両替商。幸田成友はフランソワーズ・カロンの『日本大王国志』の解説で、「近世の初めには京都が大きかったことが分かる」と書いています。大阪が何時大きくなるのか。この問題は僕は分からないのです。

これは私の責任もありますけれども、終戦後の昭和二〇年代の日本近世史といったら農地改革の影響でみんな太閤検地にほれ込んで、農村でなければ分らないというので、みんな農村ばかりやって、僕も、そのやった本人がこんなことを言うなんて天に向かつて唾を吐くようなものですけれども、大阪の持っている意味というのは何か分からなかったのです。それから大阪と中国、四国、九州との飛脚問屋のネットワークの具体的なこともわからない。

9. 商人と宗教のネットワーク

藤村 もう一つの問題は、大阪で資料が開拓できないのです。それからもう一つの問題に関連しますが、近世の商業とか町人の研究をやると、東京の先生は国会図書館の『旧幕府引継書』(45)をみんな使ってください。大阪の方はみんな近江商人で阪僑だとか何とか言っているところへ行って、実際の会社の書類を使われますね。

大阪は徳川慶喜が負けて帰った後、大坂城が炎上したため、書類が残っていないので、東京の先生の言っている商業史と大阪の先生の言っている商業史、これは両方とも商業史をやっているけれども、違うものをやっているのではないかと思います。現在の仕事をみていませんで、間違っているかもしれないが。

(43) 『近世民衆史の史料学』(青木書店、二〇〇一)・『松波勘十郎捜索』(上下、平凡社、二〇〇七)

(44) 吉田 東伍(一八六四―一九一八)一八九二年、読売新聞入社。早稲田大学教授。日本歴史地理学。能楽研究。『大日本地名辞書増補』(富山房、一九七六)・『世阿弥六部集』(一九〇九)

(45) 旧幕府引継書 江戸幕府諸役所の記録類のなかで、明治維新のうち東京府庁に引き継がれ、保管された一群の書類の総称。現在は国立国会図書館所蔵。

僕が見た資料は白木屋と越後屋・島屋系統ですけれども、島屋の場合は木綿問屋と酒の問屋がスポンサーになっていきます。京都の飛脚問屋の越後屋孫兵衛は三井で、近江屋五兵衛は白木屋がスポンサーです。三井越後屋と白木屋がスポンサーになっていたら、京都の室町の呉服問屋が別家のかたちで系列下に飛脚問屋がなかったと考えるほうが論理上はおかしいのです。

飛脚の関係で申しますと、一番、僕は興味があるけれども分からないのは、本願寺さんがあれだけ近世の各お寺の資料集を出しておられます。僕は買っていませんけれども、奈良本辰也が『明治維新の東本願寺』にお書きになっているようです。

あれだけ各地に道場とかお寺があつて石山に本山がある。石山が潰れて本願寺になったといたら、これはネットワークがなかったら教団が成立するはずがないのです。三井高陽はドイツ騎士修道会の通信連絡を「ドイツ文化史—交通史からの展望」に書いています。

僕は、創価大学で慶応からおいでになった森岡敬一郎先生から注意されて、トニーの『宗教と資本主義の興隆』という岩波文庫の翻訳があるそうです。「あれをお前は読まないといけない。宗教というものとお前のやっている飛脚とか銀行とかいうものは無関係ではない」。お恥ずかしい次第ですが、まだ読んでいないのです。

梅村又次先生が言ったのは本願寺が北海道に布教しました。本願寺から北海道までのパイプがあつてそのパイプの中で福島のお寺もネットワークに入っているだろう。だから明治になって福島で安積の開拓をやるときに、北海道でアメリカのクラークの開拓の話が入って来ていて、そういうものがおそらく本願寺にも入ってきた。北海道から来たか、京都の本願寺から来たか知らないけれども、本願寺の京都と北海道との連絡路上の福島県下の寺が駅で、藩か地主に開拓についての情報が入って、福島にそういう思想が入ってそれで開拓された可能性がないかと、お前はどっと思つかと言われたのです。

大阪の買物案内とか京都の買物案内を見ましても、商売上のネットワークは分かるのです

(46)

白木屋 近世の江戸店持京商人、小間物・呉服問屋。開祖は大村彦太郎で近江国長浜村の出自である。十七世紀半ばに京都に材木店を出店したのを始めとし、間もなく江戸に出店し、小間物を扱い徐々に呉服にも手を広げる。飛脚問屋京屋と密接な関係を持ち、天保八年（一八三七）に京屋が立て替えた甲府代官所の年貢金が支払われなかった。その借金を保証人であった白木屋が負うことになり、経営悪化につながる。

(47)

奈良本 辰也（一九一三—二〇〇一）京都帝国大学卒。立命館大学教授、京都国際外国語センター学院長。日本中世史、幕末史。『近代陶磁器業の成立』（伊藤書店、一九四三）・『近世封建社会史論』（高桐書院、一九四八）・『日本近世の思想と文化』（岩波書店、一九七八）

(48)

森岡 敬一郎（一九二一—）慶応義塾大学卒。慶応義塾大学教授。創価大学教授。西洋中世史。ガンスホーフ『封建制度』（慶應通信、一九六八）・マルク・ブロック『封建社会』（共訳、みすず書房、一九七三）・ホルト『マグナ・カルタ』（慶応義塾大学出版会、二〇〇〇）

かけたら、「京阪の石場で降りろと。おれの家に来る前に義仲寺へ行って来い」と言うわけです。

国語学校卒。

義仲寺へとお参りしていて、これがやはり文学的ではないのです。芭蕉にはちつとも感激しなくて、義仲はここで死んだか、本人はここに埋葬したか知りませんが、考えてみたら宇治川の合戦とか瀬田の唐橋なんていったら、東から敵が攻めてきて、防衛するときここでドンチャン戦争をやっているわけでしょう。

それで負けて逃げるほうは木曾義仲にしても誰にしても北陸方面へ逃げるときに、大津を通って行きます。大津の人間というのは事が起こった時から前後左右見て暮らさないと飯が食べていけなくなるところだということがよく分かったのです。大阪なんていうのもやはりそういうことでしょう。

それからそういう意味では、徳川家康は織田信長が殺されたときに、堺にいて茶屋四郎次郎が面倒を見てお金をばらまいて、あとで取り立てて呉服飾にしたということになっていますけれども、そんなにとんちんかんだったのでしょうか。

小田 その辺はよく分らないところです。

藤村 暴露したら、逆に言うと大韓航空機が落ちたときにアメリカはしないのに日本は傍受したと全部出したでしょう。おかげで日本の傍受体制とかは全部変更しないといけなくなるわけです。飛脚というのはこれに関連して、一種のスパイだろうと思つのです。

10. 飛脚と情報

藤村 江戸の定飛脚問屋の仕法書だったかに、道中で何か事が起こったときには江戸の町年寄に報告しろと言つのが出てくるのです。それから、友達から教えてもらったのは、関西でたぶ

ん出雲街道だと思つたのですけれども、宿場では大阪から来た飛脚がこういう話をしていたと伝えられたということです。近年、宿場の旦那とか地主に焦点を当てた情報史研究というものが大変盛んでしょう。そういう中にも出てくる。

伊丹の造り酒屋の岡田さんという方がいます。生物をやっているあの人の随筆を見ると、ずいぶん伊丹にいるのに上方の話とかが伝わっているわけです。

私は田舎者ですから旧制高等学校のときの思い出で、先生方は夏休みになったら東京へ行くわけです。東京へ行って自分が習った大学の先生に会って話を聞いたり、仲間に会って東京でこういう本が流行っていると、田舎ですから、東京ではこういう洋書が初めて翻訳されたそうだとか言つて、授業をそつちのけにして夏休み明け一番初めは先生もしゃべりたい。

たぶん飛脚問屋にとつても、各宿とか各街道筋のうちに「こういう話がありますよ」と言つて伝えてやるとか、人間は情報を仕入れるときにゾルゲ事件も近衛内閣に食い込んで日本の情報をすべて出したというかたちで処罰されていますけれども、オット大使が駐日ドイツ大使になれたのはゾルゲが問題ない範囲でロシア側の情報を流したり、近衛のブレインの昭和研究会だつて、一緒に殺されたのは『愛情はふる星のごとく』を遺した日本人の尾崎秀実でしたか、ああいう連中側にゾルゲを通じて、構わない範囲で、サルカニ合戦ではないけれども、相手に何も渡さないで一方的に情報が入るなんて考えるほうが無理だと思つたのです。だつたら、西日本でしたら大阪でこういうことがありますよとか、米が高いとかいう情報をしゃべつて、その代わり帰ったら出雲街道の美作ではこうだつたとかどうだつたとかという情報交換があつたはずですよ。

たぶん逆に言つたら、これはあくまで想像ですけれども、富山の薬売りがお客さんのうちの縁談を取り持っているという例があります。これは各家庭の事情に通じていなければなりません。また新聞記者もそうですね。全員がそつなるわけではありませんが、自民党の派閥に

入ったら、最初は新聞記者のたまりで、最後には代議士の茶の間に行けたら万歳だという。それで朝日新聞の新聞記者はみんな最後は自民党の代議士の後がまにしてみらうということもあります。また小田さんのご研究の宿屋ですね。道中の飛脚屋はおそらく宿屋が本業で、飛脚屋は兼業でしょうね。宿屋の主人のネットワーク、宿屋間のネットも問題だと思います。

僕は、これが日本社会の付き合いの仕方の普通のかたちだろうと思うのです。プライベートとかオフィシャルのところが垣根を何とかしながら、松平の名字をいただくのと同じですね。源氏鶏太の小説の世界も似たものではないでしょうか。

お客さんと飛脚問屋という付き合いもあるけれども、道中を歩いている宰領だとか飛脚自身も情報も含めて、利右衛門と同じで弁が立つて楽しく話ができるという能力がないと務まらないと思うのです。

天明元年（一七八一）に上州で編改会所の設置に反対して百姓一揆が起こるわけです。十七屋孫兵衛店が高崎、桐生、大間々に支店がございますけれども、三井の江戸両替店の書類を見ますと、百姓一揆の最中とか、利根川が別の時期に氾濫するのですが、どこまで氾濫したとか、「朝日新聞の北京特派員誰それ発」よりはるかに詳しいのです。

現実に百姓一揆が動いているなかで、あれだけ広い範囲の情報を集めて、それを文章にしてバツと書いて送る。私は百姓一揆の研究をやるつもりはないのですけれども、飛脚問屋の研究をやる言っても飛脚問屋の出した報告書も必要だろうと思うのです。

これだけの文才があつて、これだけの情報収集能力といたら、普段から支店の親父がその支店の下の利右衛門みたいな人が当然いるのだらうと思いますけれども、藩や代官所、また名主とか宿場のボスなど、ついでに人足問屋を通じて、漠然と書いているけれども、百姓一揆の真つ最中ですから、どう見てもこれは一揆側の事情を分かっているか書けないのではないかというような情報まで入るのです。だからこれは相当な人脈があるのではないのでしょうか。

慶応四年（一八六八）の街道東征で官軍が来たら山岡鉄舟⁽⁵⁰⁾は駿河国の宿屋かどこかにいて、玄關から官軍が来たから「お前は、この隠し戸から下の階段を通って船に乗れ」と逃げていてしょう。どちらが勝ってもいいようにちゃんとそろばんが合つくらい、「本土決戦・国体護持」と言つて、最後まで戦争しようなんてことは考えないくらいの頭のいい人の集まりではないかと思つています。

だから飛脚問屋の営業というのはそういうこと言つと、逆に言つたら幕府は隠密を非常に放ちます。情報というのはいくら正確か知らないけれども、一つの情報だけで判断するトップというのは絶対にないと思います。いくつか集めないと思慮性がありません。これは書きましたけれども、渋沢栄一が後になつたら幕臣になつて、政府の役人になつて、資本主義の親玉になります。若い頃は高崎城を襲撃しようとした、全学連や全共闘よりもすごい過激派です。その時に蜂起するのに、蜂起の連絡の手紙を飛脚問屋に頼んだら検閲されるから絶対にだめだということを使いを出したと書いています。また大坂の米飛脚店の地所で、三井の大坂両替店のものがあります。堂島の米相場と三井の関係は、ロイターと株式取引所との関係と同じでしょう。

郵便局が自由民権運動の検閲をやつたというのは伊藤博文関係文書に出てきます。「高知の自由民権運動なんて全然怖くない」と書いてあります。手紙を全部検閲して見ているから分かつているのです。これは伊藤博文が突然やることは絶対ないので、幕府のときからやつていたと思つています。

飛脚問屋というのは文明の普及するための情報伝達手段でもあるけれども、幕府にとっては警察に当たる十手持ちや岡っ引きより、こちらのほうで「おい、どんな手紙が出た？」というのを見させたほうがよほど早かつたのではないのでしょうか。

小田 今の三点でふと思つたのですけれども、大阪は町年寄です。町年寄は自治ですから、お

(50) 山岡 鉄舟（一八三六—一八八八）幕末・明治の政治家・剣客。通称、鉄太郎。千葉周作に剣を学び、のち講武所剣術世話心得。明治元年（一八六八）精鋭隊頭。戊辰戦争に勝海舟の使者として静岡に行き西郷隆盛と会見。江戸開城についての勝・西郷会談の道を開く。

のずと幕府の仕事をたくさんやっておりまして、警察の仕事もやるし、裁判の仕事もやるわけですから、当然今の話が絡んでくるとそういう情報が集まってくるわけです。

藤村 そうですね。

小田 ですから、今のお話をお伺いしていて、非常に説得力が高いと思いました。

11・飛脚問屋と政権との関係

藤村 大阪の偉い人は、あちらのほうがまだというところばんをはじきます。ですから、私は決して飛脚から幕藩体制まで論じて「何とかに及ぶ」なんて言う、そんな高邁なことを書くことはできません。どうせ八二歳ですから、絶対に完成することはございません(笑)。

岩生先生に叱られる危険があります。分からないことが分かったということが僕には大きいことです。それからもう一つは、これと離れますけれども、本居宣長が、あの人は真面目な人ですから、自分の知人とか門人の住所録を作っているのです。

これは全集に入っています。これで見ますと、当然、松坂には江戸の定飛脚問屋の支店があるでしょう。松坂の定飛脚取扱所を通していると思います。送り先に定飛脚としてるのは確か三人くらいです。あとは京都まで運んだら京都の藩邸から誰やらが運んでくれる。ですから、これも私がいけないのですけれども、近代の郵便制度とか内国通運の全国ネットワークというイメージで幕末に遡行してみることがあります。だから定飛脚問屋は内国通運の前身だから、全国につながっているはずだと思うわけです。ところが本居のネットワークを見ると定飛脚問屋は他の業者や関係者を連絡する面があるかと思いますが、この住所録についてはまだ完全には理解していません。

もう一つの問題は「飛脚の研究」といったときに飛脚をどうとらえるかです。物流や文通と

いう、メッセンジャーまで全部、歩荷までも入れてしまつと考えるか。本当の「問屋」と言っている商人の延長として考えるのか。

中井さんは三井文庫の方だから越後屋孫兵衛が頭にあるでしょう。だから中井さんは定飛脚のネットワークを考えているのだらうと僕は解釈しているわけです。ところが本居のネットワークを見ますと、定飛脚問屋というのは近世にとってどういう意味を持つのか。そして鳥屋が函館や新潟などの開港場ができると全部支店を出します。だから、鳥屋は大阪出身ではあるけれども、幕府と非常に近い飛脚問屋だらう。

僕はこれも逆算でまだ当たっていないかもしれませんが、内国通運会社ができるときは、『内国通運株式会社発達史』によると株主に江戸と京都と大阪と東海道の道中の取扱店がたくさん株主になっているでしょう。だけれども、たとえば東海道に株主になった取扱店以外に運送業者はいなかったのか。

陸運元会社の株主は二〇〇円入れると書いてあったけれども、玉井さんに聞いたらそれは「変えてくれ、最初は一株五〇〇円だった」と言うのです。分社の扱い方だけでも、取扱所は例えば江戸時代は和泉屋の取扱店だったけれども、いやになったら大坂屋にすら替えるわけです。ところが、会社ですからくら替えができません。そうして拳句の果てに一株五〇〇円を出せ。これは会社側にとっては笑いが止まらないではないですか。

その問題が大阪の飛脚問屋と京都の飛脚問屋との関係の問題と絡むのです。なぜ京都と大阪の飛脚問屋が株主だけで和泉屋の（社長）吉村甚兵衛の下に入れるのか。それから吉村甚兵衛は社長になるから会社の業務を全部統括できて株主の委託を受けてと言うけれども、全部営業を握れるわけです。では他の江戸の飛脚問屋は営業からはじき出されてしまう。ということは高度成長期になって各地の酒造会社が一つになると同じで、江戸も京阪に対して万歳だったけれども、吉村さんにとっては笑いが止まらなかったのではないのでしょうか。

どうも近世の場合に定飛脚問屋というものが何かということが、明治の内国通運のような非常に大きな存在だという、こうした前提が僕は江戸時代にあつたのではないかと思いますが、同時に御免株仲間になっていられるのをどう考えるかですね。それと僕自身が分からないのは江戸時代は株仲間でしょう。ところが明治になつたら会社になります。高村直助さん⁽⁵¹⁾が『会社の誕生』という立派な本をお書きで、内容はまさにそうだと思うのですけれども、どうも内国通運の問題を考えると同業組合としての株仲間の時には行司がいるだけで営業は並列ですけれども、会社になつたら必ずほかの人ははじき出されて、ただの株主になってしまうでしょう。

ですから、政府に食いつかないと吉村さんは社長になれなかつたのだと思うのです。なれるだけの資産もあつたでしょう。見通しが良くて食い込んだ人と『夜明け前』の主人公を比べると、どうもこれはだいぶうまく立ち回つたのではないかという気がするのです。

遠藤佐々喜⁽⁵²⁾が「飛脚問屋の歴史というのは運転資金をどう調達するか、借金の歴史である」と指摘しています。借金の歴史であつたら郵便ができるときに反対するというのはおかしいではないですか。郵便になつてお上りが運転資金を全部面倒を見てくれるといつたら、本家とか取引先の旦那に頭を下げなくて済むわけですから。

『会社全書』に為替会社か通商会社の書類が入っています。あれで見ると吉村甚兵衛は通商司商社引替掛です。吉村は商人ではなく役人なのです。通信博物館に一枚刷りの書類で写した書類があると記憶があるのですけれども、吉村は関東の川船問屋の行司です。

前島密⁽⁵³⁾は駅通総監をやつた後、日本帝国郵便蒸気船会社（共同運輸）をつくりまします。飛脚の摺物を見ると、幕末に江戸から四日市、大阪まで廻船問屋が入つて上方との連絡をやつています。そして江戸、大阪の飛脚問屋はその切符の販売をしていますでしょう。ということは、当然、幕府の勘定所の御船方だったか廻船方の役人がこれにコミットしていないと考えるほうがおかしいと思うのです。

(51) 高村 直助(一九三六—) 東京大学

卒。東京大学教授、フェリス女学院大学教授、横浜市歴史博物館館長。日本近代経済史、産業史。『日本紡績業史序説』(塙書房、一九七〇・一九七二)。『日本資本主義史論 産業資本・帝国主義・独占資本』(ミネルヴァ書房、一九八〇)。『近代日本綿業と中国』(東京大学出版会、一九八二)

(52) 遠藤 佐々喜(一八七六—一九四五)

東京帝国大学卒。一九〇七年、三井家同族会事務局入社。貨幣史・金融史・両替研究。『校注両替年代記』・『新稿両替年代記關鍵 I 資料編』・『新稿両替年代記關鍵 II 考証編』(岩波書店、一九三二—三三)

(53) 前島 密(一八三五—一九一九) 明治

政府の官僚。本姓上野。新潟県の生まれ。維新後民部・大蔵両省に奉職。明治三年(一八七〇) 郵便制度設立を建議し、調査のため渡英。翌年駅通頭として近代郵便制度創設に着手。明治六

そして、郵便の創設に前島が出てきた。トップの前島は会社へ行っても役所へ行っても、実際の業務は分かるはずがありません。運用しようと思ったら係長さんをつかまえて労働組合も買収しないと動かない。考えてみると田中丘隅⁽⁵⁴⁾(休愚)は川崎の本陣で東回り海運と西回り海運の世話をして、幕府の役職は忘れましたが、御船方の役人になっています。

郵便を作ったときは道中奉行関係です。日本帝国郵便蒸気船会社(共同運輸)を作りましたが、三菱と激しい競争をします。あれは悪いことに三菱が出てきたから困ったのです。出なかつたら前島は渋沢とつるんで上手くいったのだらうと思います。渋沢は三井とも関係しています。日本帝国郵便蒸気船会社は三井が絡みます。これは徳川幕府と構成員は似ています。

『明治工業史 土木編』は、「明治元年六月、内国事務局を設置して水陸の交易のことを掌握せしめたるに創まり、宿駅役所を置き全国駅通の事務を掌理せしむ。之が為、旧幕府勘定方勤仕の官吏、皆職を民政裁判所に奉じて人馬駅通のことを司り、或は公用旅行に関する駅通の定めを設け、或は天竜川の治水工事を檢し、若しくは治河使を置きて治水に力むる事。何れも創業時代の速定政策に外ならざりしと雖も」とあり、同二年民部省の駅通司(人馬の制度、諸賃増減・助郷)となり、同七年内務省駅通寮となり「当時郵便回漕の事を司る」とあります。ですから、薩長の新しい政府ができたときに課長か部長クラス以上は薩長の人間がなりませけれども、下の係長と課長補佐クラスは幕臣がいなかつたらこれは動かなかつたのではないですか。

昔、ある商事が倒産しました。その鉄鋼部門は、部門ごと他の商事にトレードしたのではないのですか。それと似た面も感じます。実際に前島は駅通の内動いていますね。

前島を引き立てたのは誰かといったら、前島が江戸へ遷都しないかという建白書を出したという縁で、大久保利通につるんだ人でしょう。それで大久保政権のもとで郵便が始まります。前島が男爵になるのは明治三十五年です。明治十一年に大久保が殺されたときに前島は仰天し

年(一八七三)には郵便切手・全国統一料金制を採用してその基礎を確立した。

(54) 田中 丘隅(休愚)(一六六一—一七二九)江戸中期の民政家。字は喜古、号は邱愚・冠帯老人など。武蔵国多摩郡八王子の人。東海道川崎宿の本陣田中家を継ぐ。江戸に出て荻生徂徠に学び、享保八年(一七二三)八代將軍徳川吉宗に召され三十人扶持、支配勘定並に拔擢。荒川・酒匂川の治水など民政に業績をあげた。著書には「民間省要」「治水要方」などがある。

ています。僕は前島は全体とは言わないけれども、幕府の勘定所の運輸部門の人間を代表していたと思います。

一定飛脚問屋が何かということは僕は今もって分りません。前記セクシヨンと関係がありますね。分からないということが分かった次第です。ただそういうふうになると、郵便と内国通運の成立はJ.Rから国鉄になったようなもので、明治維新は今と反対ではないかと僕は思います。ただこれは、思うというだけで実証は何もないのです。

飛脚問屋の発生は非常に難しい問題で、中世とか織豊時代の飛脚はどうなっていたかという研究は私はやっていないのです。僕はこの問題に直接お答えはできないし、私は時代遅れの人間だろうとは思いますが。

発生ということになると、これは、一橋大学からおいでになった梅村又次先生から言われたけれども、戦争で物資を補給することと、平和になって物が通るルートと輸送機関は同じだという。そうでなかったら戦争ができるはずがないではないかと。

日本人の戦争は関ヶ原でもそうですが、一回で一日で終わります。これはどう考えても当たり前です。東海道というのは江戸時代になっても一番広いところは道幅三間しかない。まして関ヶ原の合戦の前に、徳川幕府の道路政策は梅村さんも黒羽先生もお書きになっているけれども、今の言葉で言えば、ソフト面はいじるけれどもハード面は幕府はほとんどいじっていないのではないのでしょうか。

幕末になって道路を少しいじりますが、それも梅村先生によると、みんな民間からわあわあ言つてということになるのです。となると、三間ないところを軍隊が通る。それで関ヶ原の合戦ですから、合戦に間に合つように各地から兵隊を集中させないといけないわけです。

藩主が通つた後で、これで万歳だ、あとは物資だけ通れるような、そんな日本の道路は絶対ない。おそらく関ヶ原の合戦のときに作戦参謀はその日にやる兵隊をどうやってうまくかき

集めるかというのが精一杯で、二日目か三日目まで物資集めてじゃんじゃんやろうなんて、そんなに物資が集まると考えるほうがおかしいよと言われました。

お前は高知県の人間だけれども、高知県の殿様（山内一豊）は掛川の城とストックしている武器と食糧を全部家康に提供した。それで掛川の五万石から二四万石に栄転したというけれども、掛川の城を一つ出しただけで上杉征伐に行っているやつが、関ヶ原まで全部行けるのになかなえるかと言われました（笑）。

一番分らないのは、街道東征で西から攻めてくるときには、来た宿場の書類を見ると食糧の調達だとか人足の調達でてんやわんやになるでしょう。それだったら將軍徳川家茂の大公儀が京都へ行くときにはそんなトラブルは全然ないです。これは各宿の文書を見ても、なぜなかつたかということは一切書いてないのです。

徳川の道路政策とか軍事政策というのは、長州征伐で大阪から向こうまで行って、倉敷に一回揚げて広島まで運ぶというのは計算外だったか計算内かは知りませんが、東海道については將軍が行くとき、農民が駆り出されて大変だったというけれども、要するに軍勢が通って飯を食べてみんな行つたわけでしょう。だから、宿駅制度というのはそういう制度ではないかと思うのです。

発生の問題を考えると、飛脚問屋自体の問題ですけれども、いつから江戸が大阪を含む上方から自立するのかわからない問題が全然分からないのです。

12. 飛脚宿の発生

藤村 飛脚宿（飛脚問屋の指定宿）の発生というときに、これは申し上げました通り、私は宿屋のほうが先だと思つたのです。宿屋が通信とかを請け負う。それからもう一つの問題は松江の

日通に吸収された飛脚屋さんが運送店をやっているときに、主人が大阪に行って宿屋をやっているのです。その書類がこのくらいの箱にいっぱいあって、戦争中のポスターまでありましたが、それがあなたが松江に行ったらなくなっていたというでしょう。その書類はどうなりました？

玉井 ちよつとよくわかりません。

藤村 入っていないのですか。

玉井 松江に行ったわけではなく、私の手元にある原家の目録に載っていたかどうかちよつとわかりません。

藤村 そうですか。その時に松江の博物館の人は地元の方ですから、「あそこの原の親父さんは非常に話がうまい人で、松江の人間は大阪に行くときは皆あそこへ行つて泊まった。地元は宿屋だから。その親父は国から来たと言つので、国から来た客と話ばかりしていた」と。それから、柳田国男の『故郷七十年』で兄が千葉のほうで医者をやっているでしょう。その時に播磨のほうから来た人間は兄が出入りしている宿屋へいつも出入りしていた。書状、荷物も同様だったと思います。

13. 飛脚関係資料にまつわる問題

小田 今までいろいろなお話を承りまして、次は玉井さんのほうから藤村先生に質問していただくつもりです。玉井さん、それではよろしくお願いたします。

玉井 はい。飛脚については本当に不勉強でよく分からないもので、今たまたま郵政資料館に、いわゆる「駅遞志料」と言われている史料がたくさんございますけれども、児玉先生の『近世交通史料集』の飛脚の史料を集めた第七巻に多くが掲載されているわけですが、活字に

なっていないものについて「駒通志料」を読む会ということでも、八人ぐらいで読ませていただいているのです。

私はそこで本当にお手伝いぐらししかしていませんけれども、たまたまご縁があつて「東海道宿毎対日記」という史料を、これは上下に分かれていますけれども、いま郵政資料館の紀要に出させていただいているのですが、その中でなかなか分らない言葉が多いのです。また言葉が分からないために意味も分らないということで、最初からそういうちょっと個別具体的な話で恐縮なのですが、そのあたりでご教授いただければと思います。

まず、一つは利右衛門です。『近世交通史料集七』に出ている史料のうち、いくつかの作者だと思つたのですが、「駒通志料」の中にあるいろいろな史料をこの方が書いておられて、その中ものを見ますと丁稚から奉公を始めて、それで非常に若い頃から才覚があつたようで、例えば奉行所なんかへ呼び出された時に、この若い三〇代の利右衛門が出ていつているいな申し開きをするとか、そういうたようなことかかなり能力がある方だったという印象があるのですが、ここに出てくる以外に史料の中から読み取れるこの利右衛門像というのについて先生の見解みたいなものがお伺いできればと思います。

あとは細かなお話で、出てくる言葉について伺いたいで、一つ一つご教授いただければと思います。飛脚のさまざまな便の名称と申しますか、そういうたものと申すとか、あとはいわゆる早飛脚についての具体的な質問です。先生も今までいろいろお書きになつておられます。

あとは会所みたいなものがどんなふうな飛脚仲間の間で成立してきているのか、なかなかこれも不明だということについてお書きになつていらつしゃつて、史料も少ないということだと思つたのですが、もしよろしければ現在のこの見解なんかも伺えればと思います。

藤村 いえいえ。いや、私も実はちょっとこの問題は参つてしましまして、あまり僕も分らないのです。それで、利右衛門については、この児玉先生の史料集にございます「定飛脚発端

旧記』の四六九頁に、「僕八江戸本町三丁目新道岩附町二産て」とここに経歴がございませう。いま玉井さんがおっしゃったとおりで奉行所にも顔が利いたようです。この定飛脚の歴史を読んでいると奉行所に呼ばれた時、奉行のほうでも応対ができない者が出てきたら、「昨日来たあいつのほうがいいからあいつに代える」というようなことを書いています。

岩城卓二さん⁽⁵⁵⁾が、『近世畿内・近国支配の構造』という本を平成十八年に柏書房でお出しになって、その中で大坂町奉行所と用達について、十八世紀以降では、「国役人足を請負う土木業者がいた事はほぼ間違いないが、(中略)それ以外に郷宿・下宿・飛脚屋等さまざまな職種を営み(三〇一頁)」とあります。ついで一橋家領の用達について、その役割として「御用状・触・差紙などの送達」があり、「規定書ではこの飛脚賃が取り決められている(三五三頁)」。そして「川口役所の溜りに詰め、諸事を『取次』しており」、この取次とは役人との「『懸引』することを含意するといつてもよい。(三五四頁)」、「御用宿として専門化せず、土木請負業・飛脚屋が主たる家業の場合も、用達であることが本業の利益に反映する度合いが強いほど村・百姓にとつて『御客方』という位置づけが顕著になったものと思われる(三六一頁)」としています。訴願と用達・郷宿として、訴願を支える人々の中に「用達は代人となつて仕事をこなせる使用人を抱えていた。手代・下代等と呼ばれ、用達が病気などのため町奉行所に出頭できないとき主人に代わつてこれを務めた。(中略)訴願に関わる者のなかには江戸の公事師に相当する『大法師』のような存在もふくまれていたのではなからうか(三七一～二頁)」と書かれています。

一方、天保一〇年版『大坂袖鑑』によるとして、用達について東町奉行所は、東御継飛脚⁽⁵⁶⁾豊島屋門蔵は兼職として東下宿、同布屋建介は兼職は東三郷惣年寄所であり、西町奉行所の御継飛脚は鍵屋治平、島屋七五郎で、ともに兼職はありません(三七二頁)。

(56) 御継飛脚 江戸時代、各宿駅において人馬を継ぎ替え、信書や貨物の運送を行った幕府公用の飛脚。御継飛脚を利用できるのは老中・京都所司代・大阪城代・駿府城代・勘定奉行・京都町奉行

(55) 岩城 卓二 関西大学卒。京都大学人文科学研究所准教授。日本近世史。『国立歴史民俗博物館研究報告』95 在郷町の成立と展開(国立歴史民俗博物館、二〇〇二)・『歴史展示とは何か』(アム・プロモーション、二〇〇三)・『近世畿内・近国支配の構造』(柏書房、二〇〇六)

ら、人足に関わるような役を負擔していた可能性がある(二三八〇頁)」としています。ここで継飛脚と下宿とは関連しているとみてもいいでしょうし、前記の利右衛門や、大坂屋茂兵衛、杉本茂十郎の行動にも同様の性格が考えられる。私は江戸の定飛脚問屋について今まで用達の視点でみていなかったため、これから考えてみたいのです。

それを読んでいて思ったのが、先年『大阪商業大学商業史博物館紀要』第四号に書かせていただいた「江戸三度飛脚問屋江戸屋飯塚家の系図、過去帳について」で触れました天明の十七屋一件の際に、十七屋に勤めていたと考えられる光仲は同家が上野国出身で、先祖は江戸、明石などにいましたが、天明期には本家は江戸の材木問屋、分家の光仲は定飛脚問屋に勤めています。一件後、光仲は大坂に行き明石屋名義で瀬戸物屋、そして江戸屋と改名し、大坂町奉行所下宿の株を求めます。寛政元年に江戸屋源右衛門の飛脚株を求めています。継飛脚以外の飛脚屋でも似た面があったからだと考えられますし、光仲は江戸の十七屋で似た経験が見聞があったと考えられます。

おそらく光仲は一件の飛脚側の実務クラスの主役で、刑にはなりませんでしたが、江戸に居られなくなり大坂に行き、前記の動きをしたのではないかと思います。

奉行所下宿とは離れますが、「市中取締類集」(『大日本近世史料』市中取締類集二四)によると天保十三(一八四二)年に吟味中病死し、闕所になった大坂屋茂兵衛の忤、針屋の仁三郎が親類、旧業者の世話で、大坂屋名義の定飛脚を願ったが、死刑になった者の忤が父の屋号で、ということになるので、弘化二(一八四五)年に不許可になりました。舞阪宿問屋場「永代控」(『舞阪町史』史料編一)に、弘化四年に江戸屋仁三郎が定飛脚家業御聞濟(経営が認可される)になっています。これは『守貞謄稿』に、大坂屋が入牢死し闕所になりましたが、「其後兵服町に江戸屋仁三郎開店す」とあるのに当たります。これは、仲間、親類間の世話で家業を再開したとも考えられます。

行・道中奉行などであった。現在のところ「五駅便覧」(樋畑雪湖監修『日本交通史料集成』一巻、一二六―一三四頁、国際交通文化協会、一九二八、聚海書林、一九八五)によるのみである。使用者についての業績については不明。

再び下宿に戻ると、江戸の定飛脚問屋大坂屋の杉本茂十郎⁽⁵⁷⁾が、十組と砂糖問屋が問題になった時に引つ張り出されます。飛脚問屋というのは結局、勘定所とか奉行所へ行つて、今で言うところとコネがついていて弁護士みたいにコンタクトしているのではないのでしょうか。杉本は口も利けたのでしようけれども、旦那のほうから見ると飛脚屋がやるのが当たり前だくらいのところがある。

飛脚屋でこういうふうな腕利きで仕事ができる人間というのは、ちょっと脱線しますけれども、考えてみると結局、旦那方のほうに顔が利いて荷物を集める能力、それから、人足を使う時に人足とか宰領に反抗されないように抑え込むとか、なだめるとか、丸め込むとか、そういう能力がないと飛脚問屋というのはいけないだろうと思うのです。研究している私はとても駄目ですね。

この利右衛門から少し離れますけれども、僕はこれは玉井さんの問題ではなくて私の問題だろうと思うのですけれども、会符の問題です。近世の研究というのは中世とちよつと断絶していますから、中世に飛脚がなかったということは絶対ないと私は思うのです。新城常三先生の『戦国時代の交通』ですか、あれを読んでも連絡がごさいます。関ヶ原の合戦なんかの時に何の連絡もなしに、関ヶ原へみんな部隊を集合させるなんていうことは絶対にできるはずがないと思うのです。

これは実証がないので玉井さんに対するご返事にはならないと思うのだけれども、それでは近世の初めに会符を使わなくて大名が自分で真面目に全部やっていたのか。もしやっていたら会符はいつから出てくるのかわかりません。

幕府の飛脚につきましても、問題になるのは三井高陽⁽⁵⁸⁾さんが出された史料集だったか何かに出てきた、継飛脚があつて、道中があつてというリストです。だから、こういう偉そうな話をやるとお前はどつたのだと言われると私のほうも書いていませんからね。

(57) 杉本茂十郎(大坂屋茂兵衛)江戸町人で十組問屋の再建、三橋会所の設立に尽くした経済界の実力者。甲斐国八代郡夏目原村の百姓次左衛門の子。寛政十年(一七九八)江戸の定飛脚問屋大坂屋茂兵衛の養子となり、衰えていた経営を立て直す。文化五年(一八〇八)、砂糖問屋と十組問屋仲間との長年の紛争を和解に導き、十組問屋仲間内の発言力を強めた。十組問屋仲間再建工作と流通機構の再編に精力を注ぐ一方で、権勢欲のため商人の利害を無視してまで幕府に忠誠を尽くした。

(58) 三井 高陽(一九〇〇—一九八三)慶應義塾大学卒。三井物産・三井鉱山取締役。三井船舶社長。『交通物語』(丁

ところが、みんな宿場へ二人で担いでいって、膝栗毛流に言えば品川まで突き当たっても吹き飛ばしていくという、それ以外の勘定奉行だとか他の役職の飛脚の研究というのは私はやっていません。

紀州の七里飛脚だとか尾張とか言っても、これが分かるのは近世の後半でしょう。幕藩体制とかそんな難しい話は分かりませんが、各藩が完全に江戸と連絡なしにはできないだろうと私は思うのです。『角川日本地名辞典』の岡山県に毛利藩の飛脚取次が一ヶ所ありますね。前後の取次はまだ見ていません。

そういうふうな問題がありますから、結局は飛脚の一番の問題は、武家の飛脚だとかオフィシャルなたちの飛脚というのは行政がある限りは絶対にあつたと考えるべきです。僕が大学へ入った時は戦争に負けてみんなシヨックを受けていますから、江戸時代に鎖国をしたおかげで西洋にくらべて発達が遅れ、開国以後大変で、以後「追いつけ追い越せ」が問題になった。その原因は近世にあるといった考えです。そして、日本は明治維新で成功したけれども中国が成功しなかったのはなぜかという、こういう問題の立て方です。

日本では高度成長に成功したら、たちまちのうちに遅れた原因だった近世が浮上したでしょう。高度成長に離陸するための滑走路を作ってきたのは江戸時代からであるとなつた。こういうふうな歴史というのは実証的なようですね、実はとても頼りないのです。現実の問題が常に投影するわけです。

私は永井路子(59)が好きでして、新潮文庫に『つぼん亭主五十人史』が「ございます。それを読んでみると紀伊国屋文左衛門とか三井の主人が出てくるのですけれども、一番金もうけをするのは政府にぶら下がることだとはつきり書いています。いつの時代でも役所にぶら下がるのが一番金もうけできると。これは明治から後も同じだと思つたのです。それなら、飛脚屋にとっては玉井さんのところの日通(60)指定とか、こういう看板をいただいたほうがいつの時代で

未出版社、一九三二）・『世界交通史話』（同文館出版部、一九四一）・『日本交通文化史』（地人書館、一九四二）

(59) 永井 路子（一九二五—）昭和後期

—平成時代の歴史小説家。小学館に入り雑誌を編集するかたわら「近代説話」同人となる。昭和四〇年「炎環」で直木賞受賞。昭和五七年「氷環」で女流文学賞受賞。昭和六三年「雲と風

も絶対に有利です。

これは実証できませんけれども、尾州の七里飛脚が休んだりやつたりするでしょう。これはなぜなのかというのが僕は分からないのです。分からないけれども考えられることは、あの明治維新の時の兵隊の使い方とか、新撰組の近藤勇を採用して、あれは若年寄格まで行きませけれども、見方によつたらあれは全部派遣社員で戦争をして、正社員は使わなくてコストを下げようという作戦でしょう。

いつの時代でも人件費は非常に大きい問題になるでしょう。江戸時代だって人件費が問題になります。人件費は、これは実証できないけれども、幕末も武家の飛脚になるのは結局、足軽層でしょう。正規の足軽を雇うのと下請けに出して一般の飛脚問屋にやらせて会符で使うのと、どちらが藩にとって効率がいいか。これは問題意識としてはありますけれども、実証は何もないのです。『下級土族の研究』は新見吉治⁽⁶⁰⁾さんが昭和二〇年代にお書きになった後、後続の研究を私はまだ見ていません。

それで、もう一つの問題は、江戸の町をやった、伊藤好一⁽⁶¹⁾さんですが、僕が通日雇（大名行列などで雇った通し人足）をやった時に交通史研究会での報告をされて、「あんたはそんなことを言ってるけど、通日雇の値段と農村の奉公人の値段とはどうなっておりますか」と言うから、私も困って「あ、全然分かりません。これから研究します」と言ったのですけれども、まだ全然研究が進んでおりません。

そういうことになると、助郷が問題になりますけれども、助郷だけであの東海道を運用できるのですかね。各宿場には必ず人足問屋が幕末になったらあるでしょう。それで、雲助がいる。これも幕末で清水次郎長とかの話になっていますが、近世の一番初めから雲助が果たしていないのでしょうか。

これと絡む問題で、これも実証も何もないのですけれども、江戸城を築く時に軍役のかかっ

と」などで吉川英治文学賞受賞。東京女子大卒。

(60) 新見 吉治（一八七四—一九七四）東京帝国大学卒。広島文理科大学教授、徳川林政史研究所研究員、大倉精神文化研究所研究員。歴史学、教育学。

『歴史教育論』（同文書院、一九三四）『日本に於ける武家政治の歴史』（創元社、一九四一）『下級土族の研究』（日本学術振興会、一九五九）

(61) 伊藤 好一（一九一六—没年不明）日本近世史。『近世在方市の構造』（隣人社）・『武蔵野と水車小屋』（クオリア、一九八四）

た大名が全部国元から人足を呼んできたなら、これはどう考えても採算が合わないです。物資を運んでくるかもしれませんけれどもね。やはり、江戸城を築く時点で人足が江戸の周りにいなかったら、僕は江戸城はできないのだらうと思うのです。

そういうふうになると、宿場には問屋場があつて、本陣があつて、人足問屋があつて、それから村と宿場が一緒にありますから村の庄屋が全部いるわけです。こういう時に僕は出身が四国の高知県なので、たいへん田舎者ですけども、何年もずっと同じ家がやっているわけはないのですけれども、同じ場所に四つか五つの商売が役職の者がいて仲良くしないと、これは運用できません。

一度関係をこじらせれば、日本社会の特質で中国のように権力で上からおさえるというわけにはいかないです。一番仲良くするためにはどうすればいいのか。これも実証ではないですけども、姻戚関係を結ぶというのがいつの時代でも一番の方法だろうと思うのです。それに似た内容の小説が、池波正太郎が書いた「東海道・見附宿」です。僕はそのあたりがうまい小説だなと思うのです。

それからもう一つは、江戸文化の西山松之助⁽⁶²⁾さんです。あの方の吉川弘文館から出た『しぶらの里』という自伝があるのです。あの人は赤穂の近くの有年の宿場の本陣のご出身です。小さい宿場ですが、おじさんが人足寄せのボスだということです。これは逆に言ったら、表とアンダーグラウンドが親戚になつて使い分けをやっているのではないですか。

僕は宿場をやっていませんけれども、雲州の七里や地方史誌を見て気がついたことですが、本陣と問屋を同じ家がやっている場合が地方史誌で見た限りではわりと多いです。だから、研究としては本陣とか問屋場で分けるのだけれども、実際の宿場の運用としては同じ家で行っている。

江戸時代というのは、限られた中で誰か金もうけをしたら誰やらが貧乏になるという時代で

(62)

西山 松之助(一九二一) 東京高等師範学校卒。東京教育大学教授、関西大学教授、成城大学教授。近世日本文化史。『家元の研究』(校倉書房、一九五九)・『しぶらの里 宿場町民俗誌』(吉川弘文館、一九八二)・『日本の美と伝統』(岩波書店、一九八九)

しよう。確か宮本常一が「あらうれし、隣の蔵が売られていく」というのを、あの解釈は隣が貧乏ではなくて、村の中で誰やらが突出して金持ちになったら、その人だけが金持ちになって平等ではなく、売られたので、みんな平等になるという意味です。それから、「家声録」を読むとお分かりでしょうけれども、十七屋が倒産します。そうしたら、お客がバラバラになったので島屋が非常に収益を上げた。どうも宮本常一の言っている村と飛脚問屋の営業とは類似しているのではないかと思います。

田中康雄⁽⁶³⁾さんのやった江戸商人の索引がございまして、あれで見ていると、飛脚屋だとか六組飛脚⁽⁶⁴⁾の研究でこの年まで来ましたけれども、これはほとんどが宿屋と兼業でしょう。本業は宿屋で、今のホテルのフロントに宅急便が並んでいるという、あれほどではないけれども、どうも僕は宿屋のほう主流だと思います。だから取扱所は色々なことともしていると思います。

もうかる商売が出てきたと言ったら、私は飛脚問屋だからやらないとかそんなことを言っている時代ではないと思つたのです。何でもかんでもマルチ商法でやらないと飯が食べられない。

私は昭和一桁の生まれですから、日中戦争（一九三七）が始まるまでは、西日本ですら問屋制です。これは現実には子供心で見えていますから頭から抜けないわけです。宮本又次先生の『近世問屋制の研究』を読んでも、近世の元禄とか宝暦から前はどうかというところ、私は不勉強であまりはつきりしないです。もう今の近世史の中の商業史とか政治史がどうなっているかという問題は私は勉強していません。

そういう問題だと、『近世交通史料集 七』に出てくる飛脚問屋の大江丸です。この父親は島屋へ入る前は北国問屋をやっているでしょう。飛脚屋の顧客で顔が利いたから島屋の組合へ入れてもらえるのです。それから、十七屋は仙台の買米で引つかかる時、あれは仙台藩に貸付をやっているでしょう。

(63) 田中 康雄（一九四〇—）慶応義塾

大学院卒。三井文庫。群馬県史編纂室、群馬県立文書館長。日本近世史『江戸商家・商人名データ総覧』（椋風舎、二〇一〇）

(64) 六組飛脚 参勤交代の大名などに人足を供給する通日雇人足の請負をする業者があり、かれらも飛脚業を営んでいた。寛政元年に江戸の通日雇請負人一九四人が仲間を作り、京橋組・日本橋組・芝口組・大芝組・神田組・山之手組の六組飛脚仲間となった。

もう一つの問題は戦前、三井高陽さんがやった『交通文化』という雑誌がございませう。あれに遠藤佐々喜さんが飛脚の論文を書いています。遠藤さんは三井文庫の史料をご覧になって、三井文庫がある頃、公開禁止ですから史料は出さなさいけれども、いま読むと三井文庫のもので書いているなというのがよく分かるのです。遠藤さんは、飛脚問屋の歴史は資本金がなくなつて金を貸してくれという歴史であると書いているのです。

そう考えると今度は京屋⁽⁶⁵⁾なんていうのは、これで見ていると京屋の一番初めは、近江屋ですか。近江屋は白木屋の番頭だったと「家声録」にあります。江源組とか手板組というのが出てくるでしょう。僕が見ている史料というのは三井のものと、東大経済学部の白木屋のものと、それから東急の五島慶太の美術館ですね。あそこに白木屋文書が入っています。林玲子⁽⁶⁶⁾が多少触れていますけれども、聞いたら東大の白木屋は土屋喬雄先生が古本屋からお買いになつたようです。それから、東大の法学部にも白木屋が若干あるけれども、これは中田薫さんが買ったもので、証文ばかりです。他の江戸屋とかはスポンサーがいるか、いないかです。

一番困るのは大阪と京都の飛脚の史料というのは全然発掘されていない。『駅通志稿』のもとになった史料はなぜ集まったかと言ったら、あれを編纂するからという法令が出て、それでおそらく鳥屋が提出して、「家声録」以外は鳥屋に返さなかつたから原本が残つたのだらうと思うのです。少しずれますが、「駅通明鑑」に明治五年、陸運元会社免許証書には「定飛脚仲間第壹大区小五区瀬戸物町七番地借古河市兵衛外四人略」とありますから、鳥屋は小野組と関係があり、小野組の倒産にまきこまれたかとも思いますが、実証はしていません。

問題になるのは、前半のところはこの大江丸の「家声録」です。これは大阪から江戸を見た史料でしょう。利右衛門というのは江戸に在るわけですから、後のほうになると江戸のほうの史料になって京都と大阪は全然分からない。

それから、大阪は日通さんが供養なさっているのではないかと思うのですけれども、正覚寺

(65)

京屋 江戸の京大坂定飛脚問屋。天明七年(一七八七)に京都の順番飛脚問屋の持株になり、その内の近江屋の一人持になった。近江屋は白木屋の持株のため、白木屋の準分店化した。本店は江戸の室町二丁目。上州、奥州、甲州、出羽、相模に分店を展開。

(66)

林 玲子(一九三〇—) 東京大学卒。流通経済大学名誉教授。日本経済史。日本近世商品流通史。『江戸問屋仲間の研究—幕藩体制下の都市商業資本』(御茶の水書房、一九六七)・『近世の市場構造と流通』(吉川弘文館、二〇〇〇)

に家業興立先塋塔という鳥屋と津国屋が建てた石塔がございますね。あそこへ僕は行ったので。行ったら、戦災でお焼けになるまではうちへ供養においてになりましたが、戦災後はまったくお見えになりませんという話でした。その次に行った時は、今度は和尚さんが代替わりして別の人が和尚さんになっていて、区画整理してましたから、無縁仏をまつるような石像の仏さまが真ん中へ移るなど様変わりしていました。

14. 飛脚宰領とやくざ

藤村 そういうことで結局、大阪と、それで江戸の飛脚問屋というものがどういう形でできたかと、これで見ると限りは京都と大阪が組合を作って、江戸が大きくなって大丸が東京に出てきたように、金もつけができるチャンスを放り出すことはない。商売人が先に来たか武家が先に来たかで、そうなたらどうしても交通手段が必要になって出てくる。

「家声録」を見ていると飛脚の何とか屋は元は茶わん屋だとか八百屋だとかあります。そこへ荷物を集荷して、そこへ宰領が泊まれてというのが結局、飛脚問屋か飛脚屋だろうと思うのです。巻島さんにもお聞きしたいと思うのですけれども、宰領がやって飛脚問屋は直接の運搬はやらないのでしょうか。

巻島 そうですね。飛脚問屋と宰領の関係は私も悩んでいるというか迷っているところです。

藤村 僕はこれで見ると限りは柳屋だとか近江屋だとか、大阪と京都のほうから宰領が来ています。

結局、僕は三井文庫の史料でこれもようまとめられないし、もうこの年ですからだめだろうと思うのだけれども、僕が理解しているのは、江戸の飛脚屋というのはお客が来たからこの荷物はいくらだと言って請け負う。もちろん営業拡大の仕事もしています。そしていつまでに送

りますと。上方から来た宰領に自分の手数料を差し引いたものを下請けのかたちで渡して、これでお前が全部やれと。

これも分からないですけども、宰領の下にいる子分です。これが全ての宰領にいるか、いないかが分からないけれども、江戸へ上方から全部連れてきてやったら、これは宰領も人件費が大変です。だから、清水次郎長の清水はあれは通らないけれども江尻あたりになるのか、あそここの宿場の問屋場のほうに行つて、人足で、この荷物を上方へ送るけれども、どこからどこまでいくらで請け負わないかと下請けの下請けに出すのだと思つたのです。

逆に一つ言つと問屋場の帳付をやっている者とか実務をやっている者が、『日本随筆大成』の、吉川弘文館で出ている第一期の四巻に堀秀成が「磯山千鳥」として、思い出を書いていて、宿場のことを書いていきます。それから田中丘隅『民間省要』を読んでいると、問屋場の帳付というのは助郷の人とか人足とかにお前はどうかと割り振らないといけないから『ボス性』がないと務まらないということを書いていきます。

それから、人足問屋はやくざが絡まないとはいえずが、それから、やくざを黙らせるのに一番いい方法は巻島さん、何だと思ひますか。

巻島 やくざを黙らせる方法ですか。

藤村 ええ。あなたは上州にお住まいでしょう。

巻島 お金ですかね。

藤村 二足のわらじを履いて十手を握らるか、あなたの言つとおり、お金をつかまますかです。

創価大学で私は信託銀行からおいになつた信託法の先生と一緒になりました、その先生から京王線の特急でご講義を賜つたのです。

大学を出て一番初めにあなたは何をしましたかと言つたら、株主総会で上役がいる横に封筒をポケットに入れて立つのです。それで、総会屋が来ますね。そしたら額面の違つ袋を上役の

サインで渡すのです。それで、總會屋が、例えば十万円懐へ入っているはずだと思っていたのに、中身が一万円だったら、「おい、おれをどうしてくれるんだ」と、かみつかれると。だから、その顔をちゃんと見て使い分けをするのも一つの仕事だったそうです。

宰領は雲助が、「おれを使ってくれ」とか言って怒るので斬りつけたら、それでも「使わねえか」と、出血多量で死ぬまでついて来たとかいうふうな話があります。ああいう人を斬ったというのは、あれはトラブルになったから記録に残るので、うまくやるためには「君、まあそう言わないで、これでもまあまあ仕事して飲んでくれ」とか言ってなだめる。交通業ですから、この商売は止まったらだめでしょう。けんかなんかしていたら商売あがったりです。そうになったら飲み代をいくら渡すかですね。田中角栄の政治資金の配り方と同じですね。

そして、辞める時には、「一番おれに盾突いたけど、あいつだったら自分に採用して、やかましいやつをおれがやる代わりにあいつに全部押さえさせる」というふうなことが僕はあつた商売だと思つのです。これは実証できないです。名前は申し上げませんが、ある私より年がいった偉い先生にこのような話をしたら、「だいたいお前、やくざみたいに強いやつのはうが採用して使う時は便利なもんだよ」と言いました。

白柳秀湖⁽⁶⁷⁾が戦前に俠客だつたか『親分子分 俠客編』というのを書いていました。東海道の静岡のあたりはやくざがいっぱいいると。白柳秀湖はやくざだけで交通労働者の雲助のことに触れていませんけれども、僕は人足問屋は、やくざをなだめないと絶対に動かないと思うのです。

ところが悪いことにこの利右衛門が書いたのは江戸の記録でしょう。だから、江戸の飛脚問屋が大きくなっているわけです。これも明治になって飛脚問屋が陸運元会社になりますと、江戸の和泉屋甚兵衛が社長になって大阪と京都は下へ入るでしょう。

国文学だとか近世史の方とお会いすると、元禄の時代は銀経済だから上方が栄えて西鶴が出

(67)

白柳 秀湖(一八八四—一九五〇)評論家・歴史家。名は武司。静岡県の生まれ。早大卒。幸徳秋水・木下尚江らの影響を受け、明治三七年(一九〇四)加藤時次郎の直行団に入り、これが平民社に合体後は平民社社員。反戦的。人文学運動の先駆となり明治三八年創立の「火鞭会」同人として活躍。明治四〇年「駅夫日記」を「新小説」に発表。

てきて、それから後は江戸幕府が金を何とかするので江戸のほうが多くなって、江戸文化が栄えるわけです。それはそれで結構だけど、いつから江戸の定飛脚問屋が上方と逆転するのか。

そうした時に、こういうことを考えれば最初はこの茶わん屋に任せていても、うまくいきだしたら誰かが大阪から出てきて、小田さん、『暖簾』を書いたのは誰でしたか。

小田 山崎です。

藤村 山崎豊子⁽⁶⁸⁾ですね。山崎豊子の小倉屋の昆布屋だった、大丸に支店を出す時は小倉屋の人が行くでしょう。行って定着するのだらうと思うのです。定着するのだけれども、大坂屋茂兵衛とか、ああいった連中の江戸の化政期ぐらいまでを見ますと、上方の飛脚問屋の番頭か誰かが「あいつは大丈夫だろうから、あそこへ養子に行け」というかたちで江戸へ出てくるわけです。そして前島密の『鴻爪痕』なんかを見ていると、確信はないけれども和泉屋はご先祖は上方の方だと書いています。

日本橋に住み着いて江戸の飛脚問屋になってしまつたというのは、幕府の勘定所の道中奉行ですか、これとコンタクトを取らないといけないかたちで常駐しないとまず商売はできないのだらうとは思うのですけれども、いつから江戸っ子になるのかという実証が全然できないのです。いっぺんできてしまったら、これが上方とどうなるかです。

京都へ行って一回飛脚屋さんの子孫に会ったのです。玉井さんのところへ史料が入っています。

玉井 飛脚屋さんの子孫というのは先生のお書きになっている京都馬借のお宅ですよ。

藤村 ええ。

玉井 幕末の頃になると形勢が逆転して飛脚の下請けみたいになる。

藤村 ええ、なるけれどもね。

玉井 もともとは馬借の熊谷仁左衛門が中心で順番飛脚ができていくんですか。

(68)

山崎 豊子(一九二四―)昭和後期―平成時代の小説家。毎日新聞社に入社し、当時上司だった井上靖に指導される。昭和三三年『花のれん』で直木賞受賞。医学界の暗部を描いた『白い巨塔』(昭和四〇年)以来、『不毛地帯』『大地の子』で社会的なテーマを追求して話題を呼び、平成三年菊池寛賞受賞。京都女子専門学校卒。

藤村 ええ。そこはまだつめていません。では、それにちょっと関連しますと、この利右衛門⁽⁶⁹⁾が書いた定飛脚問屋の一番初めは大阪の三度飛脚⁽⁷⁰⁾を請け負ったところから始まるのです。大阪の大番頭ですが、あの役職はいつからできたのか。それから、利右衛門は「定飛脚問屋発端旧記」では大坂落城の記述に続いて三度飛脚通いとし、定飛脚問屋が創業は寛永年中と申し立てますが、大坂御城内大番と百騎御番衆御宿状御付けは寛文元年だということで、それで僕はあなたの前で今はこんなことを言っていますけれども、以前は僕は『近世交通史料集七』を丸呑みにして、寛永から始まったと書いたわけですが、実際は不明ですね。何となく、発端旧記の記述は明治の郵便創業談の徳川版といった気がします。

前に言った伊東彌之助さんが日本橋の魚問屋の坊ちゃんだったのです。『三田学会雑誌』に杉本茂十郎の研究をお書きになったのです。

教えてくれと言ってご縁で習ったのですけれども、一番いけなかったのは、若かったので伊東さんが今から思ったら、六組は化政期の杉本の時に協定を結んで大名の職場を定飛脚と分けますね。あの頃は、定飛脚が強くなってきているけれども、その前は六組のほうが強かったのではないかと仰っていました。それをきちんとうかがわなかったですね。

江戸という時になぜこれが独立したかたちになってくるのか。いつまで上方の支店というかたちで江戸の定飛脚問屋があるのか。これははっきりしません。

この家業興立先塋塔の高恩神とあるお客のリストがありますね。あの一番初めに出てくる小石川御殿は水戸藩でしょう。ですから、定飛脚問屋は、町人とか一般の荷物を請け負う形で、それで会符を扱うのだというかたちで考えてきたけれども、一番の金もつけ口はどうも鳥屋は水戸の会符で、それから大坂屋茂兵衛は紀伊ですが、これが大口だったのではないかと思うのです。杉本茂十郎は紀州藩から扶持を貰っています。それから、鳥屋が建替えをする時に棟か何かの大きな柱、これは水戸からもらっていますでしょう。だから、これは会符なんていう簡

(69) 利右衛門 大坂屋茂兵衛の手代。後に山田屋八左衛門の店預り人となり、利助または利右衛門と称した。

(70) 三度飛脚 二条・大坂御城門御番衆様方御宿状往返飛脚のことで、これを定飛脚問屋が請負い、次第に定飛脚問屋自体を示すことになったと考えられる。三都の飛脚はそれぞれ名が異なるが、江戸の定飛脚、京都の順番飛脚、大坂の三度飛脚が著名で、三者が相互に連絡を取りながら営業している。名称はいずれも定期的の意味である。上方商人の江戸進出に伴い営業し、街道筋や開港場など営業地域は各地に及び。東国では主に生糸生産地に支店がある。

単な話ではないと思うのです。

また、明治になって内国通運社長佐々木莊助⁽⁷¹⁾は郵便御用荷物を取り扱えなくなり、自殺に追い込まれますので、政府の御用の比重はやはり大きかったのではないかと思います。

利右衛門は玉井さんのおっしゃったとおり、やくざにも顔が利いて奉行所へ行っても口が立つて、それから水戸様のところへ行ってももみすり方が「ははあ」とか言って、それから少しは袂へ入れて、あまりやかましく言ったらその後は入れませんよという、頭は下げているけれども札束で引っぱたいているというところもあるのではないですか。こんなことは活字にできませんね。いや、勝手なことを言っても実証が何もないのだから、僕も書けと言ったらこれは書けません。

15. 飛脚史料上の用語の問題

藤村 それから、だんだんご質問から離れますけれども、私が飛脚をやるうと思つた時に前にあつた飛脚と言ったら遠藤佐々喜さんが『交通文化』に書かれたのと、それから「やくざ」なんかを書いた田村栄太郎です。児玉先生が、私が学校を出てから『近世宿駅制度の研究』をお書きになったのです。その後で日本歴史新書ですか、『宿駅』で飛脚をお書きになりました。それに古島敏雄先生の『近世日本農業の展開』で、私なんかにとっては昭和二〇年代の学生ですから非常に大きかつたわけです。

それで、利右衛門というのは、結局、そういうかたちでお得意さんにも役所にも下請けに出させる連中にも全部弁が立っていく。それで、こういう腕の利く奉公人というのは、あまり利くかどうか知りませんが、今度、阪神タイガースの星野仙一さんが楽天へ行くでしょう。あれと同じで、こういう人間はうちへ来てくれませんかとかスカウトされるのだろうと思う

(71)

佐々木 莊助(一八三五—一八九二)茨城県出身。嘉永三年(一八五〇)、江戸の定飛脚問屋和泉屋に奉公。明治五年(一八七二)、東京定飛脚問屋総代として前島密と会見。陸運元会社副頭取、内国通運会社副頭取、明治一四年に内国通会社頭取。明治二〇年(一八八七)、増資を図つたが、同二四年に郵便御用が契約満期となり、経営悪化。同二五年、自殺。

のです。そういうのは旗本の用人です。旗本同士が親せきですから、いい用人だったら、うちで使った誰それさんはいいからとよそへ行くので、僕は江戸時代だったら普通に行くのだと思うのです。利右衛門というのはこういうことくらいです。

それから利右衛門の書いたこれをどう理解するかというのが歯が立たないのです。玉井さんのご質問にはご参考にはならないのですけれども、以前、利右衛門の書いたものの現代語訳とか、出てくる分らない言葉に全部マークをつけたのです。ところが、これが全然分らないのです。

こんなことを言ったら国文学研究資料館にいたので国文の先生に怒られる危険がありますけれども、こういうボキャブラリーは一種の業界用語ですから、国語辞典にあまり出てこないでしょう。ですから、結局、逃げ口上ですけれども、わからない言葉にマークをつけてパソコンに打ち込んでもらって、用例はこうだとやらないとこれは実際の解決が出ないだろうと思います。ちょっとご参考までに申し上げますと、これがございますね。

玉井 二川宿ですか。

藤村 はい、二川宿です。これの中の渡辺さんがやったもので、二川宿の中には、天保十四年（一八四三）の「宿々江御尋廉書、二川宿控」というもので、「人馬継立方などに関する五街道取締役の質問書とその一部答書」というのがございます。その中に定飛脚の項がございます。で、「定飛脚儀 京大坂早飛脚の儀」、定飛脚と京大坂早飛脚です。「夜通し継、二条大坂割付状箇与唱へ」というのです。ですから、状箇と出てくるのが定飛脚の荷物をパックにしたものだろうと思うのです。

もう一つはこれです。『舞阪町史』の史料編1です。これが舞阪宿の問屋場の永代控です。差し上げますけれども、これの三三三六頁のところに、天保九年（一八三八）の定飛脚問屋が各宿に演舌書というを出しているのです。その中に江戸三組状箇です。それから、「従江戸三

組状箇等唱毎月二六九之夜毎二才領言人二荷物三駄つゝ限り差立候分」と来るのです。それから、「是迄丸三状箇と唱才領言人二三駄宛為持間日二差立候分二条大坂御城内大御番頭様御公用方御合印状箇立二御座候」と。

「京都よりは」という、毎月早飛脚という説明がございまして、その中に「四駄持」とか「小三度」と唱えとかですね。それから「大御番頭様御合印状箇」とか、「早番と唱え」とかね。それから、「大坂よりは」というところに「二五八日番荷と唱え」とか、状箇とか、それから、「江戸表の丸三」ですか。私が今まで見たのではこれだけです。

玉井 ちよつと拝見してもいいですか。

藤村 どうぞ差し上げます。

玉井 ありがとうございます。

藤村 だから、僕は恥ずかしい話ですけども、これをメモしておいて、それで玉井さんがおいでになったので慌てて出したのです。これはメモしようと思ってこたごたしてやっていないのですけれども、『埼玉県史料集五集』「中山道熊谷駅古今趣旨留」に三度飛脚の縄は朱だと書いています。この荷物を定飛脚でやる。これが東海道でも荷物を三度飛脚が赤縄で結んでいるかどうかというのはまだ分らないです。

その内に「京、大坂、駿府在来之御方様方々被差出候御用御荷物八三度飛脚と申、定飛脚之者内実持参り候由」とあります。

それから、縄の問題に來ると、筑摩書房が『江戸時代図誌』のシリーズを二〇年ぐらい前に出したでしょう。あの中で非常にまずいのが、説明文が多かったのですね。全部の飛脚問屋の縄のかけ方を出してくれればいいのに二、三軒だけしか出していないのです。出典がわからないので全部を確かめられません。あれで見ると、京都も大坂も縄のかけ方で、宿ではこれは十七屋だとか、これは島屋だとか全部分かったはずだろうと思います。ですから、玉井さん

には誠に申し訳ないけれども、質問書の次の『応対日記』の川崎の宿とか早馬とか戸塚のところが、ここあたりは申し訳ございませんが、これでご勘弁願えればと思います。

最後は会所です。会所というものは僕も気になっていたのですけれども、この「家声録」の中の例えばこの五頁です。元禄のところに江戸会所と出てくるでしょう。こういったものを全部拾っていただいて検討する必要があります。

16・史料とのつきあい方

藤村 私は文部省史料館に勤めていて、偉い先生が来て閲覧すると、カウンターで「この目録のこれは分らんけども」と言ったら、司書はきゅうきゅう言わされるのが嫌だから、作ったのは誰かと見ても電話がかかってくるわけです。

今は私も使う方になったから大きなことは言えませんが、お使いになる方は「これが分からないからお前はどうか。お前が整理したはずだ」と言われるけれども、整理するほうは分かっているれば誰も苦労はしません、声に出すわけにはいきません。

原田敏丸先生が滋賀大学の史料館をお作りになったわけです。それで、滋賀大学の資料館で何年かのところで記念講演をなさいました。自分たちが若い時には大都会からマイクロフィルムの機械を持って急行列車で来て、数日間滞在して帰ると。これを疑問に感じておりました。原田先生が言うておられます。「もともとと思います」。

玉井さんがおいでになるので大変恐縮なわけですけれども、物流博物館へ行ったら偉そうな顔をしないで玉井さんに頼むのです。マイクロフィルムの代わりにデジタルカメラで撮るようになりますけれども、お金もないし時間もないから私は何日もいるということではできません。

こういうカウンターの中でこの人が一番いじっているのを見つけて、最敬礼して、

「すまんけど、僕はこういいうことをやってるけども、あんた気がついたら教えてくれませんか」と下駄を預けることです。

先年小田さんのところへ行つた時に、閲覧が終わって、僕は四国の人間で真言宗なので、お墓が高知にありましたから、高知へ帰れませんが南海電車で高野山へ行つて、奥の院まで行つたらだめですけども、本山だったら大阪から日帰りできますでしょう。それで、親父の墓をちつともお参りしてないのでこうしたら、これはちよつとえらいけれども南海電車の特急に乗って総本山へ行つてお参りすればと、殊勝な心を起こしまして、それで失礼して行つたのです。

それで、奥の院というと本山と区別がつかなかったので、坊さんにしかじかかようですけれども、お経をあげてくれませんかと言つたら、総本山の坊さんは偉いですから、「そら、奥の院や」と一蹴されました。しょうがないから、本堂は大きいですから巡回するようになっていきますので、ひとつ本堂の仏様を全部拝もうかというので真面目に初めのうちは10円ずつ入れていたのです。あまりにあるので、もう最後は……。今になると、もつと閲覧する方がよかつたかなと思います。

確か小田さんのところは鳥屋か何かの封印の包み紙があつたのではないですか。

小田 金飛脚⁽⁷²⁾のものですか。

藤村 ええ、金飛脚です。

小田 ありました。当初は二つ購入していました。私の先輩が買われたのです。鳥屋かな。

藤村 鳥屋ではないです。

小田 飛脚関係ですか。

藤村 はい。

小田 ちよつとそれは自信がないです。

(72)

金飛脚 江戸時代における飛脚の一種で、金銀運送の飛脚と、江戸の定飛脚問屋鳥屋左右衛門をさす場合がある。文化三年(一八〇六)の仕法帳によると、京大坂および道中筋に宛て、金と丁銀には六・七・八・十日限幸便と並幸便、二朱判には十日限幸便と並幸便がある。

藤村 恥ずかしい話ですけどもこの年になると何とかを見たと思ひ込むのです。それで、ペーパーを書かないといけなくなって、いくら探しても出てこないのです。結局、あれは自分で都合のいい、これがあったら書けるというので作って、それで小田さんのところの商業史博物館はたくさんあるからあそこはあるはずだと、こう頭で作ってしまうのです。

それから、巻島さんの場合は特にそうでしょうけれども、ご研究をやる場合に長くなってくるでしょう。僕がマイクロフィルムで集めたものが、乾燥させる施設がないから、いまマイクロが溶けかけりだすのです。

ところが、東京国立文化財研究所で文化財の研究をなさった岩崎友吉先生⁽⁷³⁾は、写真もそうだけれどもマイクロフィルムもコピー機もできてから百年たっていないと。安全だと言っているけれども、百年たたないと残るかどうかは確定できないと言つのです。それから、宝月先生がよくおっしゃったのは、何としても原文書ですよということです。これはもう耳にタコができるほど言われました。

僕が一つだけやったのは「家声録」の人名の索引を作つて、このぐらいカードを作りました。ところが、これが原本でなく写本ですから前後から人名が合わないわけです。本当を言うと、利右衛門だったら利右衛門の文をですね、全部パソコンに打ち込んで人名とか何とかの索引を作ることです。そうしないと、この飛脚の研究というのは進まないと思います。私はパソコンは駄目です。

もう一つの問題は、国文の人と昼飯を食べていたら、市古貞次先生が入ってきました。館長室で一人でご飯を食べるのはおいしくないのだそうです。だから、出てきたということです。これは国文の人に全部押しつけて逃げてやるうと思つて黙っていたのです。それが悪いことに「下問があつて、『国書総目録』を作るについて、近世の古文書を入れるためにどうすればよいか」というので、ある人に聞きました、「どうもはっきりしていないようですね」といわれた

(73)

岩崎 友吉(一九二一没?) 東京大学卒。東京国立文化財研究所研究員。文化財保存、修理、『文化財の保存と修復』(日本放送出版協会、一九七七)、『私は国宝修理屋』(朝日新聞社)、『外国語を学ぶたのしみ』(玉川大学出版部、一九八〇)

のを思い出します。

本だとか統一が取れるでしょう。古文書だと、これは統一が取れないわけです。ですけども、自分がやらなくてコンピューターで誰かがやってくれて、それが出たら使ってやろうとかいう大変不屈なことを考えておりました。ただ、コンピューターではないのですけれども、大阪だと黒羽先生が『大阪市史』の町触の目録を出されたでしょう。

小田 はい。

藤村 やはりああいうものが出ると大変ありがたいことは確かですね。

小田 そうですね。目録類があると、いま先生が玉井さんにおっしゃったような地味な作業ですけれども、そこからヒントを得たり、研究が進むのではないかと思います。

藤村 それと同時にコンピューターで玉井さんに例えばやっていただいて、何とかの語句が出てきてボンとたたいたというので、これで分かるのだろうかという問題があります。その語句の全体をつかまえて考えないといけません。

玉井さんの場合はそんなことはない、これはちょっと近代の郵便の問題と絡ませていただきたいと思うのです。その問題で、私は資料館にいた時、古文書を整理させられたわけです。そうすると、根が近世でしょう。役所の仕事ですから、年度末までに出さないといけないのです。事務のほうでは十二月までに印刷屋の完成原稿を出せと言っわけです。できないわけです。拝み倒すのです。

飛脚をやっていて、そんな調子でした。ですから飛脚をやれば当然郵便と玉井さんのところの陸運元会社、内国通運、日通につながっていくわけです。私は近世が専門ですし、創価大学のところとも絡むのでご勘弁願いたいと思うのですが、僕の大学の時は文学部は近世まで、幕末は外国関係文書がありますから幕末とかあそこまで行くわけです。経済学部が土屋喬雄さんみたいに明治をやるのです。現在は高度成長期を経済がやって、昭和まで文学部がやってい

るでしょう。僕は近代史の講義を受けていないのです。それと、やらなくて卒業できるならやることはないと言って卒業したのですが、飛脚をやりだしたら悪いことにどうも明治までつな
がってくるのです。

ところが、巻島さんがお書きになっているものは、巻島さんは上州の現地で史料を採訪にな
っておられますから、定飛脚問屋の現地の史料なのです。それで、法令とか何とかというも
のになりますと、それはどういう問題になるかというと、その差上げました二川宿とか舞阪
でも幕府から五街道の取り調べが来て報告するわけでしょう。幕府の役人にとっては、国会で
運舩さんが日本郵便会社を問題になさいますけれども、日通さんは宅配便を日本郵便に全部ボ
ンと出しましたから、運舩さんは日通のことまでは質問しないでしょ。こういう公文書とし
て残っているものは、関連はしますから上州の現地のものなんかでも関係はするけれども、飛
脚問屋自体の営業については史料が残らないわけです。

それから、帳簿の作りのことを見ると、営業用の帳簿というのは何年かしたら捨てるでしょ
う。だから、請負証文に何年までは調査しますけれども、それから先は知らないというかたち
です。だから現在に至るまで定飛脚問屋自体の営業関係の古文書というのは発掘されていない
わけです。

それから、この利右衛門が書いた場合に、この「定飛脚問屋願済一件」というのはどういう
ことかと言ったら、道中奉行に株仲間とか問屋として認めてくれというオフィシャルな問題に
なったことを載せているわけです。

それから、大学改革になって大阪商業大学もどうですか。文部省へ出さないといけないから
改革のための書類がいっぱいできるわけです。言い換えると、改革がなければ文部省とトラブ
ルがないことをわざわざ書類を作る必要がないですね。これが百年か二百年たって大阪商業大
学史を作る時になったら、池田さんが小泉の改革の時に文部省の指令に合うように書いた書類

を巻島さんとか玉井さんのご子孫の方が大学の卒業論文で一生懸命書くと。

これは享保の改革、寛政の改革、天保の改革、あれはみんな改革を掲げる老中が出て、現場の人はえらい老中が出てきたから書類を作って合わさないと仕方がないと一生懸命作った書類が残って、それを僕やみんなが一生懸命論文を書いている面はどうでしょうか。飛脚の研究とか交通史というのはそんな高邁なことを言っているのではなくて、ここに紙に書いて残っているものがまだ分らないという時代でしょう。

それから、道中の場合に『中山道安中宿本陣文書』が出ていますね。本陣は明治になったらお客さんがなくなりますから、草津の本陣へ行ってもどうされてしまったかと言ったら、郡役所か何かに貸して、それで持っていたというのです。文化財に指定される前は、奥さんが何か小学校へお勤めですけれども、ポーンなんていうのは全部うちの修理に吹っ飛んでしまったと。文化財になって直していただけるようになってやっと息をついたと言つのです。

『西宮市史』を読むと、何冊も出ていますけれども本陣なんていう項目はないのです。大正ぐらいに出た『西宮町史』を見ると本陣のほの字もないのです。だから、たぶんあそこあたりは開発の問題もあるけれども、本陣というのは左前になってつぶれたものが多いのだろうと思うのです。多いけれども、残っている本陣は草津の木屋ですか。

小田 ええ、あります。

藤村 資料館には一冊だけ文書の整理の目録が来ているだけですけれども、整理が終わるまであれは何年もかかるのだろうと思うのです。だから、これも年寄りの逃げ口上と思って怒らなideてください。巻島さんが私の年になった頃には草津の文書が全部整理されて、行ったらボンと全部マイクロフィルムがあって、これとこれを紙焼きしると言ったらパツと出るようになりますから、その時に巻島さんがおまとめになるのです。

黒羽兵治郎先生は本庄栄治郎⁽⁷⁴⁾の門下で、おうちが草津の宿場の方ですね。

(74) 本庄 栄治郎(一八八八—一九七三)

小田 はい。

藤村 ご自分のうちの古文書で論文をお書きになっていきますし、史料集と『大阪商業史料集成』をお出しになりました。もっとお家の事とか水上交通について教えていただくべきだったと思います。ですから、池田さんにぜひお願いしたいのが大阪商業大学で古文書をぜひお集めになっていただきたいということです。

小田 古文書を収集して、目録を作り早く公開するようにしました。

藤村 そうですね。

小田 やはり公開して、多くの研究者の方が利用して研究発表をされることが大切だろうと思っただけです。だから、いま先生がおっしゃっておられることと一緒に思っただけです。公開しないことには研究は進みません。

藤村 それから、逆に言う整理させられる側にとっては、僕なんか昭和二〇年代で整理を始めた時に頼りになるものと言ったら、柳田国男の語彙です。国語辞典をつかいきれませんでした。それから、近代のものだったら、近代が明治の終わりだったらヘボンの和英辞典です。それから、もうちょっと後になれば、斎藤秀三郎の和英辞典です。それから、『広辞林』だとか何とかの古い版です。あれを引っ張ってくるのです。その時代の辞書の中でちょっと出てくる時もございます。

結局、研究者と仲良くして教えてもらわないとね、整理するほうは、僕がやったのは農村文書ですけども、飛脚屋さんだっていろいろなものが残るでしょう。そのうちの息子の結婚したものだとか、年賀状だとか、学校の卒業証書だとか、その周りの人に聞く以外に手がありません。

それから、玉井さんや、大阪商業大学もそうではないと思うのですが、私は古本屋さんを取引したことがないので。ところが、『反町茂雄』『古書肆の思い出』など参考になりま

京都帝国大学卒。京都帝国大学教授、大阪商科大学学長、上智大学文学部教授、大阪府立大学教授、龍谷大学教授、日本経済史、『徳川幕府の米価調節』（弘文堂、一九二四）・『近世の経済思想』（日本評論社、一九三二）・『日本経済思想史研究』（日本評論社、一九六六）

すね。

小田 それは面白いですね。

藤村 一誠堂さんなんかは、これは先生方より知っている面があるのではないですか。

小田 昔の古本屋さんというのは古書をよく知っていました。大学教授に教えていたぐらいです。

藤村 黒羽先生がよくおっしゃったのは、本屋さんが持ってきて売り込みに来るわけです。そうしたら、貸してもらおうと。僕は欲しくても写さなかつた。本屋さんはみんな知っておられまして、何とか先生はお買い上げにならなくてお戻しになりましたけど、お使いになりましたねって笑ってましたよと言っていました。

本屋さんとか図書館と信頼関係を築いて、関西弁で言つと「仲良うしてな」ということです。

小田 ところが、勉強していませんよ。

藤村 何をおっしゃいますか。

小田 まず身銭を切らない。自分で買わないのです。

藤村 いや、自分で買わないとおっしゃいますけれどもね。

小田 やはり自分で購入しないと。一万円とか二万円とか何かあったら、やはり買わないといけないと思うのです。僕らはずっと買ってきました。だから、自分でいろいろなものを買ってきたら、ある程度それでもう分かるのです。それは遠藤佐々喜さんと同じやり方です。

藤村 そうですね。

小田 やはり現物を見ないことには分からないです。学校の予算というのは限りがあります。収集するのも偏ります。

藤村 これが宝月圭吾先生から伺ったのは、宝月先生は東大文学部教授で史料編纂所の古文書

室長ですから、小田さんの話とはちょっとずれるので参考にならないのですけれども、中村直勝さんは古文書をご自分でお買いになったのです。

小田 そうですね。

藤村 大和文華館に入っています。中村さんの隨筆を読むと、每晚自分で買った古文書を読むと。古文書を研究し、論文を書くということはそうやって実物で勉強しないといけない。中村さんのお弟子さんですから、京都大学文学部の卒業の方にお会いすると、終戦後でも文学部の古文書の演習というのは京都大学文学部の博物館にある現物を持ってきて扱わせたそうです。東大は影写本だと。僕なんかの時は写真版です。

それと直接ではないのですけれども宝月さんがおっしゃったのは、東大の黒板勝美先生は明治時代に奈良なんかへ出張して、ご飯を食べた後、散歩に行くと、奈良の古道具屋に中世文書とか古代の文書があったのだそうです。黒板先生はそれを買って文学部へ寄付なさったとか、史料編纂所へお入れになったと言います。たぶん石井進さんが定年前に何とか文書でお出しになったのは黒板さんが寄付されたものだと思うのです。

それで、古文書を持たないといけないということもそのとおりだと思うと。黒板先生のように公共の機関に入れるというのも本当だと思いますと。私も本当だと思いますけれども、僕は三井文庫だとか小田さんのところへ行って写真を写させてもらって、だから僕はコピーホルダーです。

小田 僕はそれはそれでいいと思うのですけれども、やはり遠藤佐々喜さんの影響が強いのです。

藤村 いや、これは現物を見なければだめです。遠藤さんは岩生先生がよく推賞されましたね。

小田 やはり現物を見ないことには分からないと思うのです。それは、組織で買うとか、そう

でなければ自分で買ってそれを調べないことには分らないと思うのです。

藤村 いや、一番初めに史料館に入った時、整理させられたのは大量で七年か八年かかったのです。下つ端だから上役がだいぶかぶって僕の仕事をやってくれたからできたと思うのですけれども、最後になると年代が違っているものとか別のものが入っていると、これは別だとか、それから、署名とか年代がないとこれは何代目の誰の筆跡だとか、それから、だいたいこれは明治の感じがするとか分かるのです。これはやっていないとだめでしょう。

17・定飛脚問屋の株

小田 最後に巻島さんの方からのご質問をお願いします。

巻島 今までも京屋と島屋の名前が出ていましたが、定飛脚問屋の基本的なところについてお尋ねします。まず「株」についてお聞きしますが、京屋と島屋の株の異動は年次別に追うことができるのでしょうか。

藤村 株の異動については一部可能ですが、全体は不可能です。

巻島 京屋弥兵衛と嶋屋佐右衛門とは実体としての「主人」が継続して存在したのでしょうか？

藤村 島屋佐右衛門は法人格と見ていいでしょう。つまり実力者が別にいる。島屋佐右衛門とは、島屋株を持つ者の行司がそれに当たるのではないのでしょうか。

巻島 著名な俳諧師の相伴大江丸を島屋佐右衛門とイコールとするのは間違いであるということでしょうか？

藤村 そうです。大江丸はあくまで島屋株を持つ業者の代表格というのでしょうか。実はまだ確認とまではいっていません。

巻島 なるほど。京屋弥兵衛も同様なのでしょうか？

藤村 京屋は島屋とはまた別です。これもこれからですね。

巻島 それと大坂の三度飛脚仲間、京都の順番飛脚仲間に関する史料は保管されているのでしょうか。江源組、手板組などいかがでしょうか。

藤村 大坂の三度飛脚仲間に関しては残念ながら『大阪市史』にある記述ぐらいでしかわかりません。京都の順番飛脚仲間の史料は三井文庫にある越後屋孫兵衛(75)のものが中心です。ほかはないのか、未発掘ということかと思えます。要するにわからないということがわかったということです。

(以上は二〇一〇年十月二十・二十一日に、東京都調布市の藤村潤一郎先生の自宅で行ったインタビューの記録である。)

(75) 越後屋孫兵衛 京都順番飛脚問屋の一つで、初代は江州岡本村の生まれ。三井家の家祖高利が江戸に出店した時から、荷物の輸送を請け負っていたという。八代目からは孫右衛門と改名している。